653
337

0054635000

0054635-000

653－337

新輯岡山県伝説読本

花田一重・著

文正社書店

昭和９

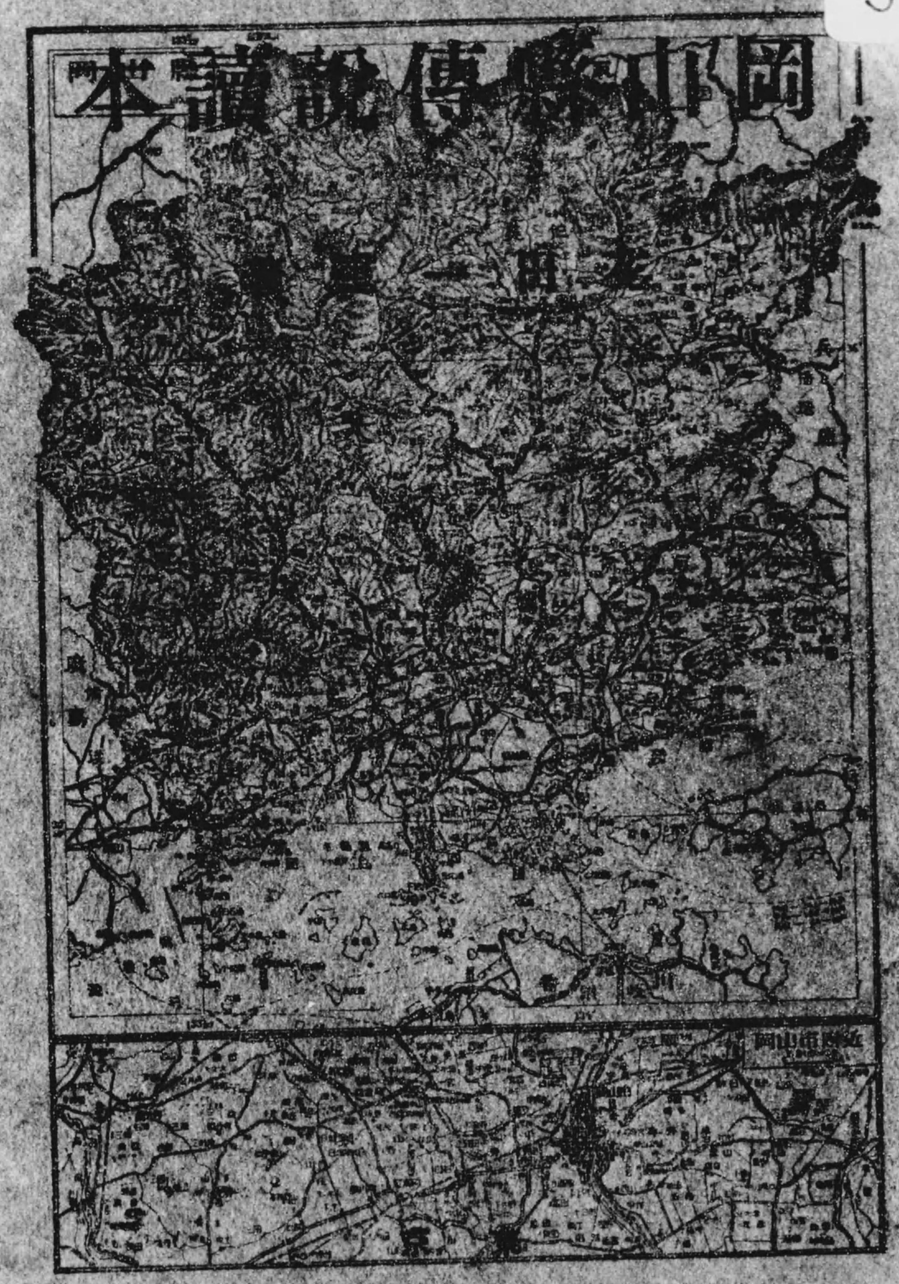
AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

653
337

新輯

岡山縣傳說讀本



文正社書店

花岡山驛 重著

新編 傳說讀本 全

發行所 東京 文正社書店

昭和九年 帝國圖書

653-337

序

傳說を以て直ちに史實とするのは謬見である。しかし傳說の價値を論ずるに、史學の上にのみ立脚して、一顧の價値もなきものとするのは、之れ亦大なる謬見である。傳說は傳說として、他に從屬せず別個に存在の意義を有するものである。傳說は一人の手によつて成れるものにあらず、誰れ言ふとなく語り傳へられたものであつて、之れを記錄さるゝに及び、傳說特有の薫りをもつ傳說文學ともなるのである。傳說は言語、表象、思想、信仰、風俗等を研究する上に於て尊き資料である。また傳說中には暗示、譬喩等を秘めてゐるものもある。一概に傳說を荒唐無稽なものとすべきではない。よく研究して見ると、科學的說明の出來るものが隨分ある。

傳說には、移動性、同化性、融通性或は成長といふことがあり、或は兩岳背競傳說と云ひ、或は沈鐘傳說と云つたやうに類型なる傳說が多いが、また仔細に調べて見ると、其地方特有なものがあり、或は他から移入して來た傳說にも其地其地の地方色を見出すことが出來る。

吾々が鄉土愛の心を起すと云ふこと其れは、わが生家、墳墓の地、日々の生活と云ふ外

郷土史によつて史蹟郷土に幾星霜の昔を想ふと云ふことが郷土に深みを持たすわけだ。しかし郷土の山川が己が心にしみ込んで、異郷に出ても離れぬのは、史蹟としての山川といふよりは、むしろ傳説的山川の方が濃厚ではないか。それは幼時より父母や故老から聽かされてゐる話の多くは郷土史より傳説が多いから、幼時より吾々の心は溫い郷土の傳説といふ薄絹に包まれて居り、何山は何年頃、何の守某の城址であると云ふよりは、昔、あの山に踏み迷うた旅の子が、あの山を幾めぐりしても里へ出られないと云ふ傳説の方を思ひ出し、其山を見た時、旅の子が今に泣き〳〵山を廻つてゐるやうに思へてならぬ。郷土の傳説といふものが、郷土の人としての吾々をはぐくみ育てゝくれたことは、實に大なるものであると思ふ。されば吾々は、野中の一本の松の木を見ても、たゞ松柏科の黒松として見ることは出來ない。野中の一つ松は、昔からあそこに、ひとりたつて居て淋しからうと云ふ情心を起させる。傳説によつてはぐくまれた吾々の心は詩である、文學である。

私が岡山縣の傳説を集めかけたのは、大正八年三月岡山縣立圖書館の司書勤務當時からであつた。縣下各都邑の中等學校、小學校に依頼して、生徒兒童の傳説、郷土史等に關する文を募集し「郷土文集—吉備の國」と題して、第一輯（第一編備前國、第二編備中國）を、大正九年三月四日第十三回開館記念日に、同館研究部から發行し、續いて第二輯（第三編美作國）をも發行した。其後私は書籍雜誌等に傳説が出てゐると購入したり寫したり又新聞の切抜などをしてゐたが、昨年の夏事あり、其殆ど全部を失ふに及び、十四年間の苦心水の泡となつた。しかし其儘に倒れる自分ではない。直ちに資料の復舊方法を立て、其翌日より着手した。さうすると偶然にも茅屋を訪ねて來られ、未知の傳説を語つて聽かされる日東史文檢合格者横山三男氏の如きあり、私の元氣も百倍して來た。斯くて私は上京し、上野の帝國圖書館に通つて傳説研究に關する圖書を漁り、或は各傳説集の中より岡山縣の傳説を書き抜きなどした。しかし「日本傳説叢書」の中にも備前、備中、美作の卷は無く、其他にも岡山縣の傳説は寥々たるものである。されば、日本傳説の研究上より見るも岡山縣の傳説が殆ど中央へ出てゐないと云ふことは遺憾なことであると痛感し、愈々此事業に猛進することゝなつた。歸郷後、帝國圖書館讀書相談部、日比谷圖書館調査掛等より、傳説研究書に關し、親切なる回答を與へられたことを感謝する。私は現に岡山縣玉島高等女學校に勤務してゐるが、歴史科を擔任してゐる關係上、屢々生徒と共に郷土資料を蒐集し、其中には傳説あり、其れは學校所在地の關係上、淺口郡に關するものが多いが

また中には他の郡の傳說もあり、或はそれが機緣となつて良書のあることを知り、或は此傳說については誰に尋ねたらよいかと云ふ樣なことを知る便利を得た。

岡山縣の傳說研究上、特筆すべきは、大正十年「山陽新報」が初めて夕刊を發行し出した時、同編輯長杉山榮氏が「縣下の傳說」を百餘篇連載されたことである。ペンネームは透谷魔と書いてあつたかと思ふ。私は當時切拔をしてゐたのであるが、昨年の夏他の資料と共に失ひ痛惜してゐたところ、或る日、縣立圖書館へ行つた時、河本司書に「何か岡山縣の傳說を書いたものはありませんか」と尋ねたところ、取出されたのは、大正十三年發行、萬代勝栗氏著「萬代博物館創設誌」附錄の「縣下の傳說」であつた。之れなる哉。杉山氏が「山陽新報」に連載された傳說を此書によつて再び見ることが出來た。私は同書を拜借して全部寫したのである。ところが出原徹氏により、岡山の文獻書房から「岡山傳說集」が出版されてゐると知り、購入した所、昭和六年の發行で「縣下の傳說」と同文であつて、傳說の數も大差は無かつた。文獻書房の分で傳說が百十三篇ある。而してもと杉山氏が書かれた序文の終に

數年間、私の蒐集めた岡山縣の傳說は既に二百に近く、其多くは北部の地方に屬する。

そしてその一部は既に他の方面で發表したが、更に新たなる材料を加へて今是を再錄するに當つて、私は、更に南部西部の方面にも、此の研究の歩を進めつゝある事を附記して置きたい。

とある通り、備前の上道、備中の倉敷、都窪、吉備、上房、川上、阿哲の一市六郡を缺いてゐるやうである。しかし此百餘篇を蒐集されたことは實に大なる功績であつた。桂又三郎氏は眞摯なる民俗學の研究家である。或は名木珍石傳說と云ひ、或は地名傳說と云ひ冊を別にして出版された。昭和七年發行の「岡山縣名木珍石傳說集」は、木之部七種の書に據り、倉敷、赤磐、邑久、後月、川上、阿哲、津山、久米を缺き、石之部は二十六種の書に據りて、倉敷、津山を缺く。また昭和八年發行の「岡山縣地名傳說集」は十六種の書に據り、倉敷、阿哲、津山を缺くも、地名傳說百二十六に及び、甚だ便利である。

斯くの如くにして、書籍により或る郡市の傳說をば多數を得べきも、或る郡市にては皆無のものさへある。こゝに於て、私はさうした郡市に到りて故老を訪ね、或は知人に手紙を馳せて回答を求むる等、百方手を盡して其の缺けたる郡市の傳說を補はんことに力めた。

私が、鄕土雜誌「汎岡山」の昭和七年新年號より「岡山縣の傳說」を連載するや、出原

徹氏は、早くも目を注がれ、出版しては如何との話があつた。私の今までの著書は、會や個人から依頼され、或は公務として書いたものであるが、此度は同氏の斡旋により初めて拙著を街頭に送るのである。希くは世の多くの人達に愛されて健在なれよ。私が集めた岡山縣の傳説は、今餘程の數に上つてゐる。しかし直ちに大部なる傳説集を出すのもどうかと考へるので、先づ其中から最も教育的な資料のみを選んで「岡山縣傳説讀本」と題して出版することゝした。此書が教育家諸氏の御參考となり、生徒諸君の讀物となり、又傳説研究家、鄉土研究家の資料となり、一般の讀物ともなるならば、著者の幸福之れに過ぐるものは無い。本書出版に至るまでの概要を記して序文に代へる。

昭和九年五月二十二日

著者しるす

新輯 岡山縣傳説讀本

目次

備前國

一、天神岩(岡山市)……一
二、弓の名人斑鳩三次(同)……一
三、金川の法號石(御津郡)……三
四、猪の股の急流(同)……三
五、血洗の瀧(赤磐郡)……四
六、大山鳥(同)……五
七、大蛇に追はれし龍神の乙姫(和氣郡)……五
八、浦上の婚禮(同)……六
九、犬島の犬石(邑久郡)……七
十、裳掛岩(同)……一一
十一、西大寺緣起(上道郡)……一三

十二、沖田の人柱(同)……一七
十三、蘭の香(兒島郡)……一七
十四、浮洲岩(同)……一八

備中國

十五、大島屋の甘藷種(倉敷市)……一九
十六、金の雞(同)……二〇
十七、不洗觀音の緣起(都窪郡)……二一
十八、旛立松(同)……二三
十九、千年比丘尼(淺口郡)……二三
二十、玉島にゐた頃の良寛(同)……二六
二十一、血染の繪馬(小田郡)……二七
二十二、猪鹿の鉢わり(同)……二八
二十三、鑿矢の宮(後月郡)……二九
二十四、五十歳落(同)……二九
二十五、吉備津彦命の鬼退治(吉備郡)……三〇

二十六、八幡の樂人元正の笛(同)……三五
二十七、赤土の傳說(上房郡)……三五
二十八、弘法大師と栗(同)……三六
二十九、玄賓谷(川上郡)……三六
三十、鬼石(同)……三七
三十一、河童石(阿哲郡)……三七
三十二、水神の怒(同)……三八

美作國

三十三、姿見橋(津山市)……三八
三十四、佛の片袖(同)……三九
三十五、化生寺の龍石(眞庭郡)……四〇
三十六、酒槽石(同)……四一
三十七、男山女山(苫田郡)……四一
三十八、杓子岩(同)……四三
三十九、茄子畑(勝田郡)……四三

四十、白壁の池(同)……四三
四十一、焔硝の粉(英田郡)……四三
四十二、赤石(同)……四三
四十三、二つ柳(久米郡)……四三
四十四、笛吹山(同)……四六

傳說研究

一　本書傳說の原據……四八
二　岡山縣傳說分布表……五一
三　岡山縣傳說年表……五五
四　傳說研究參考書目……五七
五　小學讀本中の傳說……六八
六　中等學校國語讀本中の傳說……七五

目次終

例言

一、本書傳說の排列は傳說類型の分類法に據らずして、國郡市別となし、一郡市二篇づゝとした。

一、本書の研究篇に、岡山縣傳說分布表、岡山縣傳說年表等を揭げたが、なほ本書所載の各傳說に就いての研究あるも、豫定の紙數を越えるので省略した。

一、「岡山縣傳說集」と云ふ書名で續篇を刊行し、本書におさめ得ざりし原稿は其集に入れることゝした。

著者紹介

著者花田一重氏は、國劇向上會の雜誌「藝術殿」昭和八年七月號の卷頭に、文學博士坪內逍遙先生により

ことし三月三十一日、圖らずも未知の一紳士の訪問を受けた。早大の杉山令吉講師の紹介で來られたのであつた。備中玉島高等女學校等に過去二十何年か教鞭を執つてをられる傍ら、全國の史蹟や傳說の研究に心を潛め、餘暇さへあれば、東西南北に踏査旅行をするといふ篤學家なのだ。

と、書かれた程の篤學家である。また京都帝國大學黑正教授著「鄉土史研究者名簿」、農村教育研究會發行「鄉土研究家名簿」歷史教育研究會編輯「鄉土史は如何に研究すべきか」中の「鄉土研究家錄」に其の芳名を列ね、また最近、東京高等師範學校保科教授主幹の「國語教育」に揭載の「全日本國語教育研究家總覽」中の一人である。

斯くて著者が公務に研究に多忙なる間に於て、余の願を納れられて「岡山縣傳說讀本」の著遂に成り欣びに堪へない次第である。本書の如き研究は、單に岡山縣のみならず、日本傳說研究上に炬火を翳せしものと云ふべきである。出版に當り著者を紹介し、併せて著者連日の勞を謝す。

昭和九年六月

出原徹しるす

新輯 岡山縣傳說讀本

備前國

一、天神岩

いま岡山縣の縣廳の在るところが天神山であつて、江戸時代、備中鴨方藩主池田信濃守の館があつた。天神山の名の起りは、もとこゝに祀つてあつた天滿宮、所謂天神樣に因り、其社は貞享四年（紀元二三四七年）に市內石關町の酒折の宮の境內に遷された。

天神山の北岸に大岩があつた。其長さは數丈であつて、石の根はお湟の水底に達してゐた。此岩の名も天神岩と云ひ、之れに觸れると間もなく病氣にかゝる。また蟲や鳥は此石にとまると、立ちどころに死んだこともあると云ふ。周圍の有樣は變つて來たが天神岩は今にある。

二、弓の名人斑鳩三次

「熊野神社矢除けの守」を肌身につけて出陣すると云ふことが流行した長州征伐の時（元治元年）（二五

二四）のことであつた。

弓の名人とは知る筈もない御札賣は斑鳩の宅へもやつて來た。滔々と由來を述べたて、

「いかなる矢にても除けまする」

と言ふと、じつと默つて聽いてゐた斑鳩、何思ひけんつか〳〵つと奥へ入り、弓に矢を番へて立ち現はれ

「それでは、この矢を除けて見ろ」

と呼ばはりながら、御札賣にねらひを付けて强弓を滿月の如く引き絞つたのであるからたまらない。御札賣は眞青になつて表へ飛び出した。いかな斑鳩もこゝらで許してやつたら何事も無かつたに、

「それ程有難い守札を持ちながらなぜ逃げるか」

と後追つ駈けて、ひようと放つた一矢、御札賣はどうと倒れたまゝ息は絶えた。

騙りの守賣ではあつたが、斑鳩は人殺しの咎めにより、遂に惜まれつゝも永の御暇で岡山を立ち退くことゝなつた。

かうなつても斑鳩は平氣なもので、大身の槍に鎧櫃を引掛けて背負ひ、他には一物もなく、意氣揚々として我が家を立ち出でた。遠ざかりゆく岡山城に名殘を惜むと云ふやうなことも無く、故郷である播州龍野を指してさつさと歸つて行く。斑鳩は御國境の三石峠を越し、一軒の茶店を見つけて、

「暫く休息させてくれぬか」

と一間に姿をかくしたが中々出て來ない。どうしたのであらうかと中を窺つたところ、腹一文字に掻き切つて既に息絶え、白壁に「忠臣不仕二君」と鮮血を以て書き殘してあつた。

三、金川の法號石

宇甘川が御津郡金川町を流れる所に、法號石又は妙號石と稱し、法華の題目を書いた小石を、時々發見することがある。其文字は分明に存して居り、偶々得た者の貴重愛翫するところである。里人の說によれば、此川で鵜を使ひ漁をする者が水に溺れて死に、一僧來りて其死を悼み、追福の爲めに數千の石に題目を書して水中に沈めたものであると云ふ。

四、猪の股の急流

岡山から三里ばかり北に行つた所、旭川をさしばさみ、金山と高倉山と對峙する山麓に下牧の里（備前國御津郡）がある。

昔此二山の頂には各々城砦が築かれて居り、それが相敵對あつて屢々干戈を交へたのである。或る年の戰に高倉山城の軍は散々に打敗られ、主將猪股小平太は金山城の捕虜となつた。そして無慘にも小平太は旭川原に引出されて打首に處せられることゝなつた。其時首斬り役は無情にも、

「お前にもし勇氣があるなら、此瀨を溯つて見よ」

と罵りながら、颯と白刃をあびせた。あゝ其時であつた、打落された首は、無念の形相凄まじく急流をず

ん〳〵と溯つたのである。

恨みは長し旭川、其瀬をば今も猪の股と呼び、下牧の里を訪へば、苔蒸す塚の愁しく立てるも悲愴である。

五、血洗の瀧

備前の歌人平賀元義（慶應元年（一八六五）十二月廿八日歿す、年六十八）の歌に、

赤坂の郡周匝の郷劍の峰をよめる

すさのをの神の劍のをさまりて在とふ御山みれば尊し

と云ふのがある。そして其劍の峰は、今日の地名で云へば赤磐郡山方村大字是里にあつて、此峰に鎮座ます劍拔の社の御神體は、歌にもある通り素盞嗚命の御劍である。

其由來を尋ねるに、神代の昔、素盞嗚命は簸の川上で八岐の大蛇を斬らせ給うた十握劍をひつさげて此地にお出でになり、こゝにかゝる二丈ばかりの瀧の水のあまりの美しさに劍を拔いて血をすゝぎ給うた。それより此瀧を血洗の瀧と云ふのである。そして其十握の劍を此地に留め給うたので、之れを祀つて劍拔の社と申し上げ、今は縣社宗像神社の合祀となつてゐる。

此血洗の瀧の瀧壺には瀧の主とでも云ふのであらうか、何百年住んでゐるかわからぬと云ふ大鰻が一匹居る。そして夏日照りが續いて農家が大恐慌を來す時には、村人は桝洗ひと云つて此瀧の水で桝を洗ひ、瀧の水をかへ出して例の大鰻を出し、之れに御神酒を飲ませてまた瀧壺へ放つのである。さうするとやがて叢雲が出てぽつり〳〵と雨が降りだすさうである。

六、大山鳥

赤磐郡山方村是里の本村といふ小部落に山鳥山といふ小さな山がある。

傳へるところによれば、その昔勘六といふ大男がゐて、毎日獵をしてゐたが、或る日山鳥山へ來て見るとまことに大きな化物のやうな一羽の山鳥がゐた。勘六心得たりとねらひを定めてひやうと射たところ、其矢あやまたず山鳥の腹へ突立つたが、そのまゝ山鳥は異樣な聲を立て南の方へと飛び去つてしまつた。勘六は歸るとすぐ病みついて十日もせぬ中に死んでしまつた。そして死際までその山鳥の事ばかり口走つてゐたと云ふ。

此山を山鳥山といひだしたのは其れからであつた。

七、大蛇に追はれし龍神の乙姫

文龜（一六〇一）の昔、備前の國和氣郡福河村にめづらしくも都落ちの武者が住つてゐた。それは弓の名人、宮崎刑部であつた。

刑部は或る日、その里の入電池のほとりを徘徊してゐたが、不思議や忽然、池中より世にも美しき乙姫

が現はれ、

「妾は讃岐の國萬農が池に棲む龍神なるが、志度の浦より大蛇來り攻むる屢々なれば力盡きて、はるばると海を渡り、この池に身を逃れました。今また大蛇が襲來しようとして居ります。願はくば、そなたには之れを射とめ給へよ」

と告げた。刑部は快諾して日夜を池邊に護りとほした。

或る夜明前、鳴門海峽と覺しき方より浪湧きかへり、現はれ出でたるは件の大蛇ではないか。刑部よつぴいて放てば過たず命中したが、大蛇は傷つきながらも竹が濱まで刑部を追つかけ、遂ひに狂死に死んでしまつた。

かくて歡喜に滿てる龍女は再び現はれ、刑部に方尺の手匣を授けて池中に沒した。之れより刑部の家は俄かに富み榮えた。其の後龍女の姿を見る者は無かつた。

八、浦上の婚禮

享祿五年（一二二九）浦上掃部介政宗は、和氣郡の土田松山城を攻めること甚だ急であつた。城主浦上近江守國秀は防ぐこと叶はず、城を擧げて政宗に降つた。之れより政宗は兵をして守らしめ、其身は播州に歸つた。後浦上遠江守宗景が降るに及び、其臣浦上河内守景行をして守らしめたが、同郡天神山落城の時宇喜多直家に降つた。

景行の子孫は筑前の家士となり、代々浦上四郎太夫と稱してゐた。筑前の口碑に、天神山落城の日土田松山城で婚禮があり、其最中落城の由を告げて來たので大騷動となり皆聞きおぢて落失せたといふ。そこで筑前の諺に、婚禮の席で變事のあるのを「浦上の婚禮」と云つてゐる。

九、犬島の犬石

備前國邑久郡朝日村の犬島に犬石といふ石があつて昔から神樣のやうに敬はれてゐる。嘗ては村の石工が此犬石を割らうとして谷底に跳ね飛ばされて、無殘な最期を遂げたこともある。其犬石にまつはる傳說には二說あるが、次へ次へと語らう。

昔、菅原道眞公が熊野參詣の途、紀州紀の川まで來ると路銀が失くなつて渡錢を拂ふことが出來ないと云へば、、如何にも貧相な天神樣のやうであるが、道眞公はお連れになつた犬が、毎日一椀の砂を食はすと黃金錢一枚を產み落すことを思出され、取敢えず其犬と椀とを渡守に渡して、

「此犬と椀とをお前に預けて置く。此犬は毎日一椀づゝ砂を食はせて置けば、必ず一枚の黃金錢を產んでくれる。しかし慾に目がくらんで砂を澤山食はせるやうな事があると大變だから、よく氣をつけてもらひたい」

とくれ〴〵も注意され、渡守は非常な喜びで道眞公を御渡し申した。

なんと云ふ幸福者であらう。渡守はそれから毎日一椀づゝの砂を與へて一枚づゝの黃金錢を得、見る見

るうちに富豪となつたので、里人は一様に驚いた。然るに渡守はむら〳〵と慾心をおこし、

「一椀食はせて一枚産むのなら、二椀食はせれば二枚産むにきまつてゐる。うまいぞ〳〵」

と、遂ひに道眞公の誡めを破つて、此犬に二椀の砂を食はせてしまつた。ところが渡守のあては外れて、犬は二枚の黄金錢はおろか、一枚の銅錢すら産まないのみか、其夜更に悲鳴を擧げて死んでしまつた。あてが外れていま〳〵しくてたまらない渡守は、ぶつ〳〵小言を言ひながら石の様に堅くなつた犬の屍體を籠に入れて川に流してしまつた。

延喜元年（一九〇一）道眞公が藤原時平の讒奏に遭ひ、太宰府に流謫さるゝに及び、備前河口の沖まで來ると日は暮れ空は曇り潮は速く、船は危ふくも大渦巻のたゞ中に吸ひ込まれようとした。老練なる舟子も艫を投げて途方に暮れた。此時道眞公の耳に犬の遠吠する聲が聞えた。耳を澄せば、正しく數年前紀州紀の川渡しで渡守に與へた犬の聲であつた。忽ち蘇つたやうに元氣づいた道眞公は、其聲を知るべに闇の中を漕がせたところ、辛うじて大渦巻の圏外に脱出することが出來、海岸にたどりつくと紀の川で別れた犬と寸分違はぬ形の石であつた。かくて九死に一生を得たる道眞公は、此石の傍に露滋き一夜を明かし、翌朝此處を去るに際して石の傍に小松數本を植えて記念とし、名殘惜しくも船出されたのである。

いま犬島は精煉所の煙の爲め草木は枯れて見る影もないが、此松のみはなほ青々として、千年の昔を語り顔である。そして松の皮は齒痛の妙藥であると云ふ。

。今一つの傳說とは次のやうな話である。

道眞公が筑紫へ配流の時のこと、船が播磨灘にさしかゝつた時、俄かに暴風が起り、加ふるに夜のことて一寸先も見えず、非常なる困難に遭はれつゝも航行を續けられたが、道眞公は「此上は天運に任すより他は無い」と思はれ、山の様な大浪が船ばたを打ち、今にも沈まんとする船の舳に立つて、暗黑な海を眺めて居られた。其時けたゝましく犬の吠える聲がした。

「あゝあれは確かに犬の鳴聲、されば此あたりに島があるに相違ない」

と考へられ、船頭に命じて兎も角も犬の聲のする方へと船を漕ぎ寄せられたところ、豫想通り其處には島があつた。道眞公を始め一同の喜びさこそと思はれる。

しばらくして夜は明けはなれた。すると從者がちやうど船の着いた上手に當つて斷崖の上に、一匹の白い犬が寢てゐるのを見つけた。皆の者は驚いて其事を道眞公へ申上げた。道眞公は、

「あの犬だ。あの犬が昨夜吠えたのだ。そして我々を助けてくれたのだ」

と言はれ、早速從者を引連れて其犬を見に上られた。來て見ると犬では無い、白い犬の形をした石であつた。道眞公は深く感じさせられ、其石に腰を掛けられた。其時何處からともなく白髮の漁夫が現はれて、次のやうな物語をした。

「抑々此釜石の由來を語らんに、昔何處よりか一人の漁夫が來て、長い間此邊に住んでゐたさうであるところが或る夜の靈夢に、神様が「汝によき妻を授けん」と御告げになり其漁師をゆり起された。目を醒ますと不思議にも、ぽん〳〵と鼓の音が聞えだした。すると靜かな海の眞中から美しいお姫様が出て

來た。此處を今も鼓の瀨戸と云つてゐるが、それから二人は睦じく暮してゐた。男はいつも漁をなし、お姫樣は絹機を織つてゐたところ、或る日のこと他處の大男が來て、お姫樣の織つてゐた絹を奪ひ取つて歸らうとした。お姫樣は留守中なので困じ果てゝ絹の代りにお姫樣の寶物としてゐた釜と可愛らしい一匹の白犬とを與へようとした。すると大男は怒つて其釜と犬とを海中に投げ込んだ。そしてお姫樣は其間に絹を身にまとつて夕暮の金色にかゞよふ海に身を投げて深く〳〵沈んでしまつた。其時またぽん〳〵と鼓の音がどこからとも無く聞えて來た。と見れば大男の投げた犬と釜とは海に浮び、遂ひには空高く舞ひ上り「あつ、之れは不思議」と男が大口をあけてゐる間に、釜は間もなく海中に落ちたが、犬は海へは落ちずして高い崖の上に乘りかゝつたのである。大男は恐ろしくなつたものと見えて、其儘姿をかくしてしまつた。釜と云ふのは有名な釜石と化し、白犬は只今公卿樣の乘らせ給ふところである」と語り終ると漁夫の影は消えた。道眞公は、

「さても尊き神石なるかな」

とて直ちに筆を執つて唐紙に神號を書かせられ、記念として六本の松の木を植ゑられた。

それから間もない或る暴風雨の夜、犬が吠え通した。此島に在る家と云つては其頃新しく建つた六軒の家だけであつたが、其家の人々は海賊でも入込んだのでは無いかと島中を探し廻つたのであるが別に異狀は無かつた。しかし變つたものが一つあつた。それは白犬の樣な石のまはりに六本の松が植ゑてあり、其松の枝に道眞公の親筆が載つかつてゐることであつた。

十、裳掛岩

邑久郡裳掛村大字虫明字破砂の黑井山に等覺寺と云ふ眞言宗のお寺がある。承和元年（九四四）宗祖弘法大師の創造せられしと言傳へ、靈驗あらたかに、善男善女の參拜する者が多い。境內に墨染の井があり、之れは大師巡錫の際法衣を洗はれしとて四時涸渴することがない。井の側に石を建て一首の和歌が彫りつけてある。

御衣の名にそ黑井に流れ出て
　幾世盡きせぬ墨染の井

ちやうど弘法大師が其井で法衣を洗はれた時のことであつた。それを乾かしたいと思はれ、其あたりの民家に立寄られて、

「物干竿を貸して戴きたい」

と言はれたところ

「竿はありません」

と言つてすげ無くことはられたので、大師もせん方なく衣を乾かすによい所をと探し廻られたところ、間口灣で一つの岩を見つけられ、それに衣を掛けてお干しになつた。

そこは古來曙の景色で有名な虫明の迫門であつて、今も裳掛村福谷に殘る裳掛岩がそれである。

十一、西大寺緣起

會陽を以て天下に名高き備前西大寺の緣起を語らう。

咲く花の匂ふが如く盛りなる奈良に都のあつた時代、周防國玖珂の庄に藤原泰明といふ郡司がゐて、其夫人を皆足姫と呼んだ。それは姫の父君が觀世音菩薩に祈願をこめて遂に授かつた子なれば「皆會滿足」といふ觀世音菩薩の誓願の文字に因んで皆足と名づけられたのである。

姫は幼時より才智優れ、殊に深く佛門に歸依し、日頃から心の中に願ふには、わがみはかくまでも御佛に宿緣深き者であるから、せめてさゝやかなる御堂でも造つて千手觀世音菩薩の尊像を安置し奉り、國の爲め家の爲め、且またわが身の爲めに、現世は更なり、未來の幸福をも祈りたいものと、心を千々にくだいてゐたが、如何にせん、都遠き悲しさは、佛師なければせんすべもなく月日は流れた。

或る夕方、年の頃十五六ばかりなる童子が姫の館に來つて、

「私は諸國修行をする佛師で御座りますが、今宵一夜の宿りを許させ給へ」

と賴んだ。皆足姫は年來の願ひある身なれば、急ぎ走り出でゝ見れば、年幼き童子であつて、持ち物とては僅かに鑿と槌との二品であつた。皆足は怪んで、

「わらはは御佛の尊像を作りたく思うては居りますが、此二つの道具で出來ませうか」

と問ふと、童子は打ち笑ひ、

「すべて細工の勝れたのと拙いのとは、たゞ其人の技倆によるもので御座りまして、一向道具の多少によるものでは御座りません。私は此二品をさへまだ多いと思うて居りまする」

と答へた。皆足はその一言に感じ入り、

「それではどうか此方で、ゆる〳〵と御休息なさりませ」

と言つて一室に導き、年比の望みを物語つたところ、童子は心やすく引受けて、

「何でもよろしい。木があつたら持つてお出でなさい」

と言ふので、皆足は年久しくしまつてゐた白檀の大きな木材を取出させて渡したところ、童子はしばらく打眺めてゐたが、

「佛體の高さは」

と問うた。皆足は、

「それはあなた樣にお任せ申しませう程に、よきに御作り下さりませ」

と言つた。

かくて其翌日より童子は奥の一室に入り、

「彫刻の間は必ず來て見てはなりませぬぞ。作りあげましたらばお知らせ致します」

と言つて出入の口を堅く締切り、食事の時には侍女が小窓から入れるのを受取つて食べるやうにして、一心不亂に彫刻した。皆足は眞によき佛師を得たことを歡び、一日千秋の思ひをして尊像の出來上るのを待

つてゐたが、折り〳〵槌の音さへ聞えて早や一七日ともなつたので今頃は餘程出來たであらうと、前約を忘れて其室に近よつたところ、微かな聲がして二人打語らうてゐる樣子であるので、餘りの不思議さにわれを忘れてそつと窓から覗いて見れば、今作り奉る尊像と童子とであつた。此時尊像は見つけられたのに驚いたのであらう。がばと倒れた。童子はいたく怒りて、

「汝が初めの約束を破りしは無禮であるぞ」

と言ひ、共まゝ走り出でゝ此家を去らうとするので、皆足は袖引止め、

「まことに御無禮を仕りました。此樣に勿體たい尊像をお作り下され有難う御座ります。さてもあなた樣は何國の如何なる御方でいらせられますか、何處に住まはせられますか」

と問へば、童子も心なごみ、

「吾は生れし所もなく、また住むに定まりし國もない。さりながら此處より東なる大和の國長谷と云へる地こそ、たゞわが假初の住みかである」

と言ひ殘してかき消す如く童子の姿は失せた。

さては長谷觀音の尊體を假りに現はして、わらはの祈願を叶へさせ給うたのであらうと、しばし伏し拜みつゝ、初めてぬば玉の夢よりさめし心地して、奥なる一室にはひつて見たところ、尊像の御たけ五尺餘にして、四十二臂の佛軀嚴然としてまし〳〵、且つ往時侍女をして供せしめた食膳は毫も減らずに床の上にあり、一室は靈香薫じて有難さ身にしむを覺えたので、皆足は家族一同を伴ひ來り、互ひに其靈蹟を歡

びて恭敬禮拜した。

かくて天平勝寶二年（一〇四）の春、皆足は都へ上つて尊像を彩色莊嚴にし奉り、また長谷に詣でゝ先きの恩德を謝せんと、二三人の供を連れて一葉の船を雇ひ、萬里の波を蹴つて、漸くにして眞金吹く黃微の國上道郡金岡の庄松中島の汀に潮がかりをなし、やがて船を出さうとしたが、不思議や船は磐石の如くにして動かない。追々多くの村人を雇ひ、互ひに金剛力を出させたが叶はず、餘儀なく尊像を船から陸揚げしたところ、船は輕々と浮き上つた。そこでまた尊像を船に移したところ、初めと同樣船は動かない。こゝに於て皆足は感涙を催し、

「さては御佛には此備前に住まはせ給はんとの御心と察せられまする。わらはは多年の誓願を起して作り參らせた甲斐もなく、いかなれば此地を好ませ給ふのであらうか。何故わが周防の國は佛緣薄く、此國はかくまで佛緣が深いので御座りませう」

と歎きかこちつゝも遂に準備を整へて、此地に一宇の御堂を建立し、其上棟式を擧げたのは、天平勝寶三年（一〇四）卯のとしの二月八日であつた。

事終へて皆足は再び船出して長谷觀音に詣づる途中、津の國の沖合で難風に遇つたが、本尊と長谷觀音とが空中に現はれ給ひて、皆足が長谷觀音に供へんとて船内に積みし米六十俵は忽ち飛び行き、やがて海波靜かに行路事なく參詣することが出來た。今なほ長谷の山中の兩三石に俵のかたの附いてゐるのは、其奇蹟を語るものであると云ふ。

こゝに紀州高屋の里に安隆上人といふ聖僧があつたが、寶龜八年（二七四）七月の末長谷寺に詣でゝ御通夜をしてゐたところ、其夜の夢に、

「汝備前に赴き金岡の庄に觀音堂を改造せよ」

との御佛の命があつたので、さらばと云ふので上人は勸進の爲め西國へ下向し、周防に至れば皆足深く歡喜して數多の奉加をなし、其他處々より爭ひて寄進があつたので、調度全きに及び、海を渡つて金岡への歸りを急いだのであるが、備前の國兒島の浦わ槌の戸と云ふ所まで來ると、俄かに干潟となつたので船子等は大いに驚き騷いだ。ところが遙か向ふの白砂渺々たる上に金殿玉樓列び起り、其中より白髮の老翁が歩み來り、手に持てる一個の犀角を上人に與へて、

「彼の金陵金岡こそ觀音のましますべき靈地である。されば此角をば地を選んで埋め、其上に御堂を建てられよ。佛德四方に耀きて、信徒雲の如く集るであらう」

と敎へた。上人が謹み承ると、間もなく潮滿ち追手に帆を上げて船は程なく金陵に着いた。

上人は長谷の靈夢に加ふるに龍神の敎を以てし、こゝに機緣熟せるを悟り、やがて數多の工匠を募りて事始めをなし、同九年（二八四）九月下旬に全く工事を畢へた。此時彼の上人が戴ける犀角を埋めた由緒により、古は犀戴寺と號してゐたが、後室町時代に及び、犀戴の字畫繁きを忌み、今の西大寺に改めたと云ふ。

「西大寺小唄」　（坂東龜玉氏作曲）に、

〈國寶の梵鐘はつかねど金陵山

會陽は〳〵天下に鳴りひゞく

と云ふのがあるが、其國寶の梵鐘も安隆上人が靈夢により、槌の戸の海中に沈鐘あることを知り、海人をして海底を探らせ引上げたものであると云傳へてゐる。

十二、沖田の人柱

昔、上道郡沖田村の邊一帶は海であつたが、元祿年間（二三四八一―二三六三）に開墾して新田としたものである。其開墾中、堤が潮に押流されて工事が進まず困つてゐたところ、おきたと云ふ女が進んで人柱にたち、爲めに漸く堤を完成することが出來た。そこで此尊き犧牲者を記念して、おきたを以て地名とし、後には沖田神社を建てゝ其靈を祀ることゝなつた。

十三、蘭の香

〈白石瀨戸からヨ　お船が見えるヨ
　あれは肥後樣九曜の星ヨ
　トコハイ　トノエ、ナノエ、ソレ〳〵

（下　井酌）

寛文年間（二三三二一―二）の或る秋の頃、肥後熊本の城主が參覲交代の途次、下津井沖で暴風雨に遇ひ、御座船が危險に瀕した時、此土地で問屋を營み、備前池田侯の御用達を勤めてゐた田原屋孫右衛門といふ者が

直様數艘の船を仕立てゝ赴き、事無くお救ひして我が家へと御案内申した。此時、殿には日本一の御滿悅で、

「何なりと望みのものあらば叶へて遣はす」

と仰せられた。そこで孫右衛門は恐る〳〵、

「今後、御殿様が下津井を御通航遊ばさるゝ砌、恐れながら直々の拜謁を仰付け下さりますならば、身に餘る光榮に存じ奉る」

と申上げたところ、殿には、

「それはいと易きことである」

とて御許しになり、その後御座船御通航ありし際、五百石の格式で拜謁を許され、御墨付と黄金一封と、御側近の蘭一鉢とを賜はつた。

こゝに於て孫右衛門は大いに面目を施して御見送り後、拜領の蘭を庭に植ゑたところ、二坪までも繁茂し、此蘭の花盛りの時には芳香が港外までも匂つた。かくて其後、殿が下津井港を御通過にて拜謁の際には、必ず蘭一鉢を献上したと云ふ。

十四、浮洲岩

浮洲岩は兒島郡藤戸町藤戸川のほとりにある。元暦（壽永三年一八四四）の昔、佐々木盛綱が藤戸の先陣の功名を

立てたが、其時密かに案内をした浦人を、生かして置いては他人に語るかも知れぬと思ひ、此岩の上で刺殺したと云ふ。

備中國

十五、大島屋の甘藷種

享保十七年（九二三）頃倉敷代官井戸平左衛門は、御領分石州大森に於て、救民の爲め九州より甘藷種を取寄せられ、田地百石に對し八個づゝの割合としてあまねく御領分内に頒布された。

その時倉敷の小野庄屋の親族である大島屋では、此甘藷種を珍重して保管してゐる内にふと紛失した。そして其嫌疑は終に下女のおたねにあつまつた。おたねは天城藩の士分より來れる者であつたが、元來の律義者ゆゑいたく懊惱し、果ては家出をして親元に駈付けて情を訴へた。父親は直ぐ様大島屋へ來り辯解に力めたが、最後に於て主人より言葉短くたゞ

「たねを返せ」

とあつた。そこで父親は餘りにせき込んだものか歸宅して、

「大島屋では娘を返せと言はれる、困つたものだ」

と内でいろ〳〵と相談してゐたところ、娘のおたねは堪へやらで其夜汐入川に入水して死んでしまつた。

こゝに至り父親は涙を拂つて再び大島屋に到り、

「仰せに從ひ之れを御返し申す」

と取出したのはおたねの生首であつた。主人は事の意外に驚き、自分の言葉の足らなかつたことを後悔した。そして問題の甘諸種は親族の者が持歸つてゐたことが判明し、嫌疑を受けて死んだおたねに對してい

よ〳〵すまぬ事となり、罪滅ぼしの爲め早速四軒屋の畔に墓を建てゝ厚く之れを弔うたが、大島屋では不幸續きであつた。また村人も之れを憐み、氏神樣の西手藤の木の下に小祠を造り、お種大明神として祀り諸人願かけをするに成就すると云つて一時大いに流行した。其墓のまはりには數本の松さへあつたが、今は全く市街地と化して知る由もない。

十六、金の雞

東山將軍足利義政風雅に耽り、大內氏が防長に驕る頃、明國の商船が數多の寶器を搭載して去來した。鹽飽牛島の五左衛の如き、其寶器の一なる一尺角の黃金の筐に收むる四疊半の蚊帳を藏してゐた。其の頃の八幡船蝴蝶陣は漸く影を潛めしも、海賊衆の出沒なほ止まず、一方禁制の密貿易に豪華を一世に鳴らす者がゐた。

當時倉敷の飛渡島の海峽せまりて浪が殊に凄かつた。或る時、明船がこゝで海賊衆に追はれて此島蔭に逃げ込んだところ、暗礁に乘上げて沈沒し、此船中に有つた金の雞は空しく海底の藻屑の中に沒した。

其後滄桑の變あり、年を經ること四五百年、昔海峽たりし氏神山と羽島との峽にあたり、月暗く細雨けぶる夜、此金の雞の鳴聲を聞くと云ふ。

十七、不洗觀音の緣起

倉敷市を少し離れて、東の方の小高い山に煙突が高く突立つてゐるのが見える。あれが帶江の銅山であつて、其山續きにこんもりと松の繁つた處が、所謂不洗の觀音樣を祀つてゐる景光山不洗觀音寺である。

私の家はその麓だからお母樣のまだゐられた頃は、お伴をして詣でたことも幾度あつたか知れない。

ある日のこと、此寺の緣起を和尙さんから聽いたことがある。それは小春日和のひる過ぎだつた。暖かい日かげが緣端に坐つて居られる法衣姿の和尙さんを、くつきりと障子にうつしてゐた。

「聖武天皇の天平年間(一三八九—一四〇八)の事であつた。觀世音菩薩の化身の業であるとて、世にも尊き二體の觀音樣が彫刻され、開眼供養もあつて大和の長谷寺に安置されてゐた」

かう前置をして和尙さんはちよつと目を閉ぢた。暫くして輕くうなづいて、

「さう…當山の開基は增慶上人と云ふお方だ。德渥く信仰の深い高僧であつた」

時は秋も半の靜かな或る夜、ふと目がさめた。見ると部屋の床側の額に紫美しい一團の靄がかゝつてゐる。見る〳〵うちに其靄が引きしぼられて、其間からすうつと立派な僧形が現はれ、上人を見つめて、

「吾は大和の長谷寺に住むものだ。そなたの信心に感じてこゝに來た。來たと云ふのも、世に子孫がな

い爲めに家が絶えるを苦にする年老いや、また難産にあたらうら若い女が、殊に暗から暗へと子と共に悲命の最期を遂げるのを哀れに思ふ。吾を信ずる者には、之れらの禍を除いてとらせようと思ふのだ。

そなたもよく〳〵今申したことを心得てほしい」

と言ふや、又しも紫立つて美しい靄に包まれた。貴き僧は其裡に消えていつた、紫の靄もやがて薄れて。

この佛德を受けた增慶上人は心に決するところがあつたと見えて、翌朝未明に起きいでた。俄かに旅裝をとゝのへ大和へと旅立つた。無論長谷寺へ向つたのだ。今なら早い汽車の旅だが其頃のことゝて、山を越え野を過ぎて漸く大和に入つた頃は、早一月餘も經つて、國を出た頃は山の紅葉も美くしかつたに、今は凩に散つた大和の深山の殊に淋しいものだつた。冷たい夕陽が松の梢に顫へて見える頃、漸く長谷寺に辿りついて本尊を拜した。

誦經して顏をあげると本尊の側にまた二方の觀音樣が御座した。上人は驚いた。その一方こそ何時かの夜、夢枕にたゝせ給ひし貴き御僧の面影に寸分たがはないではないか。上人は事の由を長谷寺の大和上樣に申し上げ、幾度となく願つた末許諾を得て、其觀音樣を戴いて歸り當山に安置したのである。

「其時から自然に清らかな水が山麓から湧出した。それが、それ其下の井戸ぢや。門の所にあるぢやらう」

和尙さんは膝の手を上げて指された。

「赤坊が生れて三日三夜たつて、この水で洗つてやると、無病息災で成長すると云ふのぢや。不洗觀音と云ふのか…それはな、觀音樣を信ずるとお產が易くて、三日三夜洗はなくても清くてゐるからそれで言ふのぢや。まあ信心さつしやれ、有難いことぢやて」

と和尙さんは輕い笑みをもらされた。啜い緣端に小蜂がぶん〳〵といつてゐた。（此寺は都窪郡豐洲村大字中帶江に在る）

十八、旛立松

旛立松は都窪郡帶江村有城の高坪山の麓にあつた。昔佐々木盛綱が此地で旛を立てた松であると云ふが今此松は枯れてない。

十九、千年比丘尼

遠い昔のこと、占見（備中國淺口郡金光町）の沖は一面の海で、打寄す白波に魚を打上げたり、名も知らぬ大鳥が荒磯をつたつたりした。

いつの頃からか、この濱の岬の蔭に茅葺の小屋が五つ六つ見えるやうになつた。此處に住む人は、沖へ出て魚をとつたり、干潟をつたつて貝を掘つたりする位が仕事であつた。交際も其五六軒の間だけであつたが、たゞ一つ暇な折に對岸の佐方（金光町）と伊勢講をすることにしてゐた。

正月のあたり講は佐方であつた。釣舟の便に講の案內を受けて、占見の人は誘ひあつて參つた。からい手づくりの濁酒に土杯の數を重ねた頃、主人は珍らしい魚肉の一皿を配つた。そして、

「此さかなをなんと思はつしやるか」
と言ふのであつた。みんな頭をひねつて見たが、最も年長の漁師でさへ、
「はて、まだ見たことの無いさかなぢや」
と言つた。そこで主人は得意げに此魚の珍らしいことや獲りにくかつた事について話した揚句、胴は堅い鱗によろはれてゐて、顏は赤兒其儘であつたと語つた。一同はあまりのことに氣味惡く思つた。主人は度度勸めたが誰一人箸をつける者はなかつた。皆言ひ合したやうに、
「世にも珍らしいおさかなぢや。土產に致しませう」
と言つて、包んで持つて歸るのであつた。
占見の人達が舟場へ出た時はもう夕方であつた。折柄の追手に筵帆を張ると、舟の中では今日の怪魚のことから不氣味な話が次から次へと出た。岸に近づくと、各自土產の魚をば海中に棄てゝしまつた。ところが其中のたつた一人は醉心地よく眠つてしまつて、棄てる筈の魚を其儘わが家に持ち歸つた。
此者に一人の娘があつたが、うつかりしてゐる間に其包の魚を食つてしまつたから大變だ。氣のついた時は後の祭でどうすることも出來なかつた。其後娘も大きくなつて婿さんを貰ひ、赤ん坊も出來た。それからまた幾年か經つて赤ん坊は立派な若者となり、世盛りのおとなとなつたが、やがて腰がまがり聲も嗄れて、白髮の翁となると、火の消えるやうに死んでしまつた。
人魚を食つた娘！　いや其頃はもうよいお婆さんであつたが、不思議にも老いもせねば死にもせず。父

も居らず夫も居らず子も居らぬ小屋に、一人淋しく暮してゐた。長命なお婆さんには友達もなく、また身內の者も無く、婆さんがどれだけ生きたのか、それさへ知つてゐる者がなかつた。婆さんはつくづくと人世のはかなさと自分が餘りにも長命であることゝを思ひくらべて悲哀を感じ、遂に年知らずの黑髮を剃り落して比丘尼となり諸國行脚に出た。
比丘尼が懷かしい故鄕を立つたのは、粟の穗が黃色に熟れ、蟬の鳴き聲も哀れに聞える初秋の頃であつた。里の人達はこの不思議な婆さんの旅立を濱まで見送つた。濱にはこんもりとした森がある。その森の近くの船着には、この間の暴風を避けて繫いだ千石船もゐた。比丘尼は、
「これ皆の衆、此杖がつくまにはもどつてきますぞ」
と言ひおいて船に乘つた。白衣の比丘尼は手に持つ菅笠も高々と、後振返りながら、漕ぎゆく後の白波に名殘をとゞめて、やがては狹霧の中へ消えて行つた。
實に不思議であつた。比丘尼が立つて暫らくして、あの岸に挿した杖から芽が出た。
「枯木に花が咲くと云ふが、それよりも不思議ぢや」
と村の人達は珍らしがつた「つくまに歸る」と言ひ殘したに比丘尼は何年待つても歸らなかつた。樹は人の幾世を重ねたであらう。仲び立つた梢は雲を凌ぎ、繁りあつた木蔭は地を霑はさぬと云ふ老樹になつた人々はこの古い傳說の中に成長してかうなつた老樹を懷かしいものに思つた。
占見の海が埋められて新開地になつてからの事である。村の者ではるゞゝと若狹の國へ旅をした人があ

つた。その人が若狭の或る庵でふと一人の年老いた比丘尼に逢つた。その比丘尼の問ふまゝに、備中の占見の者であると答へると、

「占見と聞いて懐かしい。わたしももとは占見に生れた者ぢや。わたしが占見を出たのは昔のことぢやが、あしこの森へはやはり船が着いて居るかな」

と問うた。旅人は驚いた。今自分の目の前にゐるのが、大昔から話し傳への千年比丘尼なのであつた。

「船が着くどころか、海も無いに」

比丘尼はこれを聞いて、今更のやうに世の轉變に驚いた。

それから暫らくして、比丘尼は其處で身を終へたと云ふことである。

後世土地の人々はこの千年比丘尼を記念して石碑を建てたと云ふ。また占見の津澳は、比丘尼が「此杖がつくまに歸る」と言ひおいた其「つくま」が地名になつたのだと云傳へられてゐる。また、何時までも年のよらない人を見ると今でも「あの人は人魚でも食つたのではないか」とよく人が言ふのである。

二十、玉島にゐた頃の良寛

良寛さんは佛教に於て、歌に於て、書に於て、天下に名を殘した高僧であつたが、玉島にゐた頃、誰も良寛さんの偉いところに氣がつかなかつた。その爲め次のやうな眞違ひを生じたのであつた。

それは或る時のこと、圓通寺の下手の西山といふ所の或る家に、物がなくなつた。それから間のないこ

と、其家には野良へ出て留守であつたが、歸つて見ると、わが家のまはりを一人の乞食坊主がうろ〳〵してゐるではないか。これは「此頃乞食坊主が物を盗み歩くと云ふことを聞いてゐるが、てつきり此奴がとつたに相違ない」と、その坊主になぐりかゝつた。しかし坊主は木像の如くにじつと立つてゐた。

そこへ寺から下りて來た人が二人の間に割つて入り、

「これは圓通寺の和尚様が、越後の國からはる〴〵と連れてお歸りになつた良寛さんといふ雲水さんだなんと云ふ勿體ないことをするのか。また、良寛さんも良寛さんだ。なぜ言ひわけをなさらぬ」

と言つた。ところが良寛さんは、

「人に疑はれては、言ひわけをしても何にもならぬ」

と言つて平氣な顏をしてゐたと云ふ。良寛さんの傳說で、玉島に傳はつてゐるのは、此話一つだけである

しかし良寛さんの修業した御堂は、今なほ圓通寺に、良寛堂と名づけて殘つてゐる。また良寛さんが書いた手毬の長歌は、圓通寺の寶物となつてゐる。

二十一、血染の繪馬

これは小田郡東部の或る村里にあつた話である。

或る家に子につらくあたる母親がゐて、わが子が泣く度毎に、

「そのやうに泣くとお宮のガモウに食はすぞ」

と言つて叱つてゐた。ガモウと云ふのは社の繪馬に描いてある怪物のことであつた。

或る夜のこと、子供はどうしたのか泣き止まない。「ガモウに食はすぞ」と言つても泣き止まない。母親は怒つて遂に子供を、

「お宮のガモウに食はれてしまへ」

と言つて、戸外につき出し、戸を手荒くしめて自分は寢床へはひつた。初めの程は子供の泣聲がしてゐたが、暫くたつて何も聞えぬ樣になつた。母親は無情にも以後の見せしめにと、其ま〻ほつて置いて寢てしまつた。

明くる朝母親が出て見ると、子供の姿は見えぬ。いかな母親も子供を探しまはり社まで上つて來て驚いた。ふと見ればそこの拜殿の繪馬—ガモウの口には眞赤な血潮が滴るばかりについてゐた。

二十二、猪麿の鉢わり

昔、備中の國小田郡に白髮部猪麿と云ふ者がゐた。心が邪見であつて佛教を信ぜず、慈悲の心が無かつたが、或る日托鉢僧が猪麿の家へ來て食を乞うた。ところが猪麿は物を施さぬのみか、托鉢僧を詈り打つて、其の持てる鉢を打破つて追ひ出した。

其後猪麿は用事があつて他の鄕へ行つたところ、途中俄雨と大風に遭ひ、先へ行くことが出來ぬので、人の倉の軒下に立寄つて雨風の止むのを待つてゐる間に、其倉が俄かに倒れて、猪麿は壓しつぶされて死んでしまつた。

二十三、鑿矢の宮

後月郡芳井村の宇戸川往來と曾馬谷往來との分岐點に戸數十數軒の一小部落がある。其處はちやうど宇戸川城址の麓で吉井の聖靈山との中間に位して野宮と云ふところだ。

頃は天正年間(一三七三—一五九二)聖靈山には藤井好玄が城を構へ、宇戸川城には多賀某が陣取つて雌雄を決しようとした。戰酣なるに及び宇戸川城では早くも矢種が盡きたので、有合せの鑿を代用して放つたが、兩軍とも好敵手であつたと見えて鑿と矢とが食合つて麓に落ちた。そこで此地を鑿矢と云ひ、小さな祠を建て鑿矢と名付けたのが、何時しか此宮をも此土地をも野宮と云ふ樣になつた。現に其祠に祀つてある御神體は鑿と矢とである。

二十四、五十歲落

後月郡三原村村入に五十歲落と云ふ所がある。其處に深い谷があつて、昔其近所の村に五十歲以上の老人が出來ると其谷へ落してゐたと云ふ。谷の深さは二十間餘であり、谷底は晝なほ暗く、其四方が禿山になつてゐるので、一旦落されたら上ることは出來ない。その上谷には狼がゐて、谷底へ下された老人は皆其餌食となつてしまふのであつた。

或る時、村の青年が大勢で、一人の老人を引つぱつて來て、一本の棒にのせて、繩卷にして谷底へ落さうとした時、老人は、

「待つてくれ」

と言つた。「どうした」と問へば、

「此繩や棒は取つときなされ、また來年も使へるではないか」

と言つた。青年等は此聲を聽いた時、今、自分共は何をしてゐるのかと云ふことを深く考へることが出來た。そして此老人を谷底へ落すことを止め、其後二度と老人を谷底へ棄てることをしなかつた。

この五十歳落に今は路がついてゐて、上り下りすることが出來るやうになつてゐる。

二十五、吉備津彦命の鬼退治

人皇第十代崇神天皇の十年（紀元前五七）四道將軍を派遣せられた。そして第七代孝靈天皇の皇子吉備津彦命は四道將軍の一人として西道（山陽）に向はせられたのである。

當時百濟より來りし溫羅と云ふ鬼が吉備の國新山（吉備郡阿曾村）に楯籠り暴威を振うた。鬼の兩眼は大にして豺の目の如く耀き、鬚や髮は赤く頰骨が甚だ强い。額の上には堅い肉が卷き上つて角をなし、口には上下の牙が喰違ひに生えてゐる。身長一丈四尺、大力計るべからず、夜な〳〵忿怒の炎を吐いて近隣の山を燒き、晝は終日、吉備の國中を飛行して民の妻子を捕へ、六畜を殺して喰つたので、他國に逃げて行く者が多かつた。

新山の鬼の城の飯炊き釜は直徑九尺六寸、人畜を煮る釜は直徑一丈一尺もあつた。また人掛松があつて人肉を引掛けた。鬼が奪ひし女は多く阿曾の庄（吉備郡阿曾村）の女であつて之れを阿曾女と云つた。鬼の軍は板の旗を建てゝゐた。その里を板旗（板畑）と云ふ。鬼は時に巖の上に登つて赤い扇を開き、西國より都に上る貢物の船を招き寄せて奪ひ取つた。また屢々坐石にありては雲霧を吐き、往來する人を迷はし雷火を降して人民を燒き殺し悲慘を極めたので、人皆涙の乾く時はなかつた。

こゝに於て命は吉備の中山の巖の上に萱葺の宮を建て、その周圍に重臣の家を建てゝ之れを守り、稱して宮內（吉備郡眞金町）と云つた。そして片岡山に石楯を築く等戰鬪準備をした。こゝを楯築山と云ふ。德高き命のいます宮內から北に通じては廣々とした野原があり、こゝを芳嘉鄕（御津郡馬屋下村芳賀）と云つた。そこで人民は多く此邊に來り住ひ、藻を採り磯菜を摘んで山盛りにして命に獻じた。それが飯盛山である。

仁慈に御座す命は、人民が鬼に苦しめらるゝを歎かせ給ひ、しばしも御座に安んぜず、苦味の食に砂を交へて食し給ひて民の悲歎を忘れ給はず、鬼征伐に着手された。乃ち命の臣、夜留靈臣は腰に劍を佩び、手には鼓を持つて駈引をした。今其所を鼓山と云ふ。西南に夜目山がある。命の臣、夜目麻呂を遣はして夜行の惡鬼を防がれた所であつて、後に夜部（都窪郡庄村）と云ふ。

命の臣に樂々森といふ者がゐた。之れは須臾にして百里を翔る非凡の將であつて、常に葦守（吉備郡足守町）にゐて人民を守つた。當時此地方に水が少くて人民が非常に苦しんだが、樂々森は忽ち東方の山頂の巖石を

穿つて水を湧出させ、人民は之れを汲んで渇を醫することが出來た。後此山を龍王山と云ふ。

夜行の鬼の暴虐なほ止まず、夜毎に人を捕へ手足を割いて巖石や枯木の枝に掛けなどした。命は怒つて樂々森に命じて討たされたが、形を分明に見ることを得ず、前にあると思へば忽焉として後にある。そこで或る夕暮、樂々森は鬼の城（阿曾村）の麓に飛び行きて待つた。さうすると何物とは知れず、怪しき者出で來つて飛び掛つた。兩者共に摑み裂かんと電火石火相爭うたが、樂々森遂に劍を拔いてざぶりと斬つた。鬼が痛みに苦しむ所を七太刀刺通して首を取り、之れを晒し者にした。其首を見るに無髮にして頭に肉角あり、口は耳まで割けて居り、一足三手であつた。より て此鬼を晒し者にした所を三手の里と云ふ。

之れより大合戰となり、鬼の軍は變化の術を以て東西に奔走し南北に馳驅し、進むに疾風の如く、戰ひては岩を飛ばし火を降らし、或ひは雷霆の一時に落ちかゝるが如く、天に轟き地を動かした。宮內と鬼の城と相距るとこ百餘町であるが、負けず劣らず弓矢に妙を得し兩軍の矢と矢とが空中で食ひ合つて落ちた後其所に社を建てゝ矢食の宮と云ふ。ところが鬼の軍が夜陰に乘じて射たところの矢が食合はずして、宮內より三十餘町を越して備前の坂に落ちた。こゝを箭坂（御津郡大野村）と云ふ。また命の矢は鬼の城の麓の蛇が窩の岩に中り、岩の破片は飛んで遙か五里餘の地に落ちた。そこは矢翔の里卽ち今日の小田郡矢掛町である。かくの如くにして命も弓勢緩みて見えける時、住吉明神牧童に化して命の前に現はれ給ひ、

「命には矢いくさのみ遊ばされては、御勢盡きて亡び給ふで御座りませう」

と言つて笑はれた。命之れを聞召し怒り給はず、

「それでは、お前は如何なる謀をもつてゐるか」

とお問ひになると、牧童は、

「それは二筋の矢を番へておうちになつたら宜しい。さうすると一筋は食ひ合ひ、一筋は鬼の胸に中りませう」

と答へた。

命げにもと思召し、神力妙術、千鈞の勁弩に大矢二筋を番へて發たるゝに、果せる哉、一矢は食ひ合つて水中に落ちしも、一矢は鬼の胸に中り、坐石から眞逆樣に倒れ落ちたが、其時鬼が踏みつけた足跡が今なほ石の面に殘つてゐる。命は之れを見て劍を拔き疾風の如く飛んで行かれたところ、鬼は叶はぬと思つたのであらう。神出鬼沒の妖術を以て逃げ隱れることを企て、四五歲の童子に身を變じ、數千人でも動かし難き大磐石を押開いて身を隱さうとした。其手形は今に石の裏にある。しかし其時命は千變萬化の神術を以て之れに當り、電光の如く襲ひ來つたので、鬼は遂に石窟の中に入ることが出來ず、忽ち雷鳴と黑雲とを起し、山河萬木を震動して雨を降らすこと鉾を突くが如く、須臾にして洪水となり山を穿ち岩をころがし、激浪は土砂を押し流した。さうして其中へ鬼は飛込んだが、濁水は忽ち血川と化して、腥風吹き荒び、電光ひらめき雷鳴りはためく間に大海に逃げようとしたのである。此時命は樂々森に命じて此血水を吸ひ乾し給うた。之れが血吸川（阿曾村）である。

かくて鬼は神通力既に衰へ鯉と化して下るところに、命は忽ち鸕の鳥に身を變じて、鯉に化した鬼を食

ひ上げて遂に打殺された。後此處に社を建てゝ鯉喰の宮と云ふ。吉備津神社の分身の御神である。

夜留靈臣は鼓山にゐたが、命が鬼を追ひ廻される狀を遙かに見て怖れをなし、西北三里餘の所に飛び去つた。ところが手に持つてゐる鼓が鳴つて止まぬので、田の中へ打捨てゝ高田の里（吉備郡日近村大字高田）へ隱れてしまつた。其田を鼓田と云ひ鼓石が今にある。命大いに怒らせ給ひ、出仕を止めさせられ、また樂々森に命じて大井川（日近村大字高田）の此方に入ることを禁じられた。そこに樂々森大明神を祀つてゐる。

其後命は鬼の頭を串に刺して晒された。其地を首部（御津郡平津村首部）といふ。鬼の首は執念にも年月を經るも吼えて止まず、山河に反響していかにも凄い。そこで命は狗飼武に命じて其頭を犬に喰はしめられた。然るに肉のところを食ひ盡して髑髏となつても動いて吼えた。よりて命は、

「わが食事を炊く竈の底に埋めよ」

と言はれた。よりて竈の下を八尺掘つて鬼の首を埋め、鬼が生前恩愛の阿曾女をして朝暮の火を焚かせたところ、其後十二年間は吼え呻く聲數里に及んだ。今日阿曾女が仕へてゐる御竈殿の釜が卽ちそれであつて、御釜を焚けば其鳴動により吉凶をトふことが出來るのである。

なほ吉備津彦命の御妃も宮内に御座したが、命が鬼の城の鬼を亡ぼされし時、俄かに御心地わづらひて薨ぜさせ給うた。よりて樂々森、命に奉告せしところ、命は急ぎ飛んで歸らせられたが、既に御息絶え、御亡きがらは宮内に殘れるも、靈は大和の都に歸らせ給ふところであつた。命悲歎に堪へさせ給はず、靈に逢はんものと後を追つかけ給ひしところ、程なく追ひ付き、後より聲をかけさせ給うた。されど、むくろなき靈なれば聲を發すること能はず、たゞ靜かに頭を下げて行かせられた。之れより其二つの坂を呼坂低頭坂（御津郡橘井村富原）と呼ぶのである。

二十六、八幡の樂人元正の笛

石清水八幡宮の樂人元正は笛の名人であつたが、當時備中國にあつた社領へ下向し、任務を終へて上洛の途次櫻生の泊（播州室津）まで歸ると、心が亂れて頭の髮も片鬢が雪のごとくに變じた。之れは誠に不思議なことであると云ふので、巫女に占はしたところ、吉備津の宮の託宣があつた。

「適々當國に下向して、その曲を聞かせぬにより、祟りをなす」

そこで直ちに引返して吉備津宮に詣で「皇帝」其他の祕曲を吹奏してゐる間に、白髮立ちどころにもとの如く黑髮にかへつた。

二十七、赤土の傳說

伯備線木野山驛へ汽車が着く頃、車窓に映るのは木野山神社を祀つてある木野山である。そして此邊一帶の土が赤土である事については面白い傳說がある。

昔木野山神社が祀つてあつたと云ふ所は、今と少し位置がちがつてゐたが、そこに一つの大池があつたさうだ。そして或る頃、其池の畔を毎日一人の少女が歩いてゐた。ところが、その少女は喉が渴いたもの

と見えて、池の水を飲んでゐた。すると今まで可愛らしかつた少女が見るも恐ろし大きな龍になつてしまつた。それからと云ふものは池の主となつて、夜な〳〵出ては畑物を荒し廻るので、土地の者は大いに困つた。そこへ此龍を退治る勇者が現れ出て一刀のもとにぶち斬つた。とは云へ龍は死ななかつた。傷ついたまゝ電光の如く姿を消した。

その時龍の負うた疵口から流れ出た血潮が土を眞赤に染めたので、木野山の邊は赤土だと云ふことである。

二十八、弘法大師と栗

これは今から一千一百年ばかり昔、高梁邊であつた話であるが、子供が栗の木のある所へ行つて栗の實をとつて、それを手に持つてゐた。そこへ弘法大師が通りかゝられて、

「その栗をもらへないか」

と言はれたところ、子供は惜しがつて差上げなかつた。

その頃は栗の木の低い枝にも栗の實が澤山なつてゐたが、それからと云ふものは、栗の木の高い所にしか實がならないやうになつた。

二十九、玄　賓　谷

玄賓谷は川上郡落合村字近似にある。

玄賓僧都が庵室をむすびし所故玄賓谷と云ひ、こゝに棲む雉子は口を封じられてゐるので鳴かない。なほ此地には僧都が地に突立てられた杖が根を生じて大木となつたと云ふ白檀がある。

三十、鬼　石

備中國川上郡高山村の或る山に昔鬼が住んでゐた。そして山の麓を人が通ると山頂から大きな石を投げつけたものである。

それだから今でも此山の麓には鬼が投げた石が山のやうに積み重ねられてゐる。しかも其石には悉く鬼の爪痕が殘つてゐると云ふから恐ろしい。山の頂には石らしいものは一つも無いさうである。

三十一、河　童　石

阿哲郡千屋村字花見に千屋尋常高等小學校が在るが、此學校の農園の端に自然石の墓のやうな形の石が立つてゐる。何も知らぬ子供は棒石と云つてゐるが、實は河童石なのである。

「高梁川は其源を劍山に發す」と云ふ劍山も此地にあつて、そこから流れ出る高梁川は、此河童石から云ふと少し離れて東方を流れてゐる。其川の中にゐた河童は力試しにか、又は自分の住みかの邪魔になるからか、大きな石を伯耆に通ふ往來ばたまでかつぎ上げたのである。それが證據には、河童石には河童の

手形がついてゐる。

三十二、水神の怒

大昔、大佐山の西麓菅原村（現阿哲郡）天原尻に池があつて、大蛇が棲んでゐたが、此里の者が池に薪を投じて埋めてしまはうとしたので、大蛇は大佐山頂の、今龍王池と呼ぶ池に移つたと云ふ。

池畔に八大龍王神社があつて、昔から旱魃の際の雨乞ひや霖雨の雨揚げには、村民が日を期して總詣りをなし、祈念するの慣例があり、今日に及んでゐる。雨乞雨揚げの參道は一定して居り、其先達を勤める家も亦歴然として續いてゐる。また平常でも此池にはひつて泳ぐと、忽ち大雨沛然として至り、洪水を起すと。今なほ之れを信ずる者が多い。

美作國

三十三、姿見橋

昔、美作の國戸川の宿に砂田の庄司氏勝といふ長者がゐた。子なきを歎いて子乞の森宇那堤の神に祈つて玉の如き女の子を授かり、龜千代と名づけて愛育した。龜千代少女となりて艶麗花を欺くばかりであつた。ところがこゝに庄司の家に怪事が起つた。それは毎朝奥庭の踏石の上に、水に濡へる草履を置くものがあると云ふことであつた。

腰元が之れを見て不思議に思ひ、常に注意を怠らなかつたところ、或る夜、丑みつの鐘の鳴り響く頃、龜千代はひそかに人目を忍んで家を抜け出た。腰元はいぶかりつゝ密かに尾行したところ、西の方龜が淵に至り、橋の上に佇んで暫く水面に映る己が姿を見つめてにつこりと微笑んでゐる様子であつた。腰元は覺られぬやう靜かに龜千代の後ろへ行き、水面を眺めたところ、驚くではないか。花はづかしい龜千代の顔は、恐ろしき蛇の形相と變じて水に映つてゐるのであつた。思はず發する叫び聲に、龜千代は忽ち淵に躍り込んだ。腰元は且つは驚き且つは悲しみ、

「今一度お姿を現はして下さい」

と呼ぶと、淵の底より波を漾はし、渦を卷くよと見る中に、物凄き大蛇が現れ出たので、腰元は氣も心も身は添はず、ひた走りに庄司の家に歸つたと云ふことである。

此事があつてから橋の名を姿見橋と云ふやうになつた。

三十四、佛の片袖

昔津山に惠比須屋善六と云ふ商人がゐた。名は善六であつたが性質の惡い人で、常に大小二種の桝を備へてゐて、買ふ時には大桝を用ひ、賣る時には小桝を用ひて其あひを貪つた。ところが其女房は善人であつて、屢々亭主を諫めたが一向聞かない。終に氣を病んで死去した。それでも善六の桝は改らず町内の爪

彈となつてゐた。

或る時善六の友人某が、關東からの歸途、小田原の宿場を過ぎると、死んだ筈の善六の女房が現はれて

「内の人が善からぬ事をするので、私は死んでも冥土へ行かれません。まことに御無理ながら、貴方からとくと内の人を諫めて下さい。後のしるしに之れをお預け申します」

と言つて、己が片袖を割いて渡したと思つたまに姿は消えた。

某は津山へ歸つて善六に件の片袖を渡し、ありし次第を物語つた。こゝに始めて善六も迷夢が覺めて、不正桝を改める等身の行を正し、多年蓄積した資財を抛つて寺を建立して亡き妻の菩提を弔うた。

三十五、化生寺の龍石

勝山町の化生寺の境内に龍石と云ふ石があるが、之れは下野の國那須野ケ原の殺生石の破片であつて、此石の上に生物がとまると直ちに死ぬるので、深く土中に埋めたと云ふ。

其由來を問ふに、昔那須野が原に、生ある者が近づけば必ず斃れると云ふ石があつた。よりて世人稱して殺生石と云つた。然るに至德二年（二〇四五）八月十三日玄翁和尚は勅を奉じ、柱杖を携へて那須野に到り、石を敲くこと三度「汝、元來石の性何れより來り、此靈何處より起る」と唱へ、又三度敲きたるに、其時石動いて汗を流し、忽ち破碎して日本三高田に飛び、惡靈が失せた。三高田とは越後の高田、美作の高田、安藝の高田の三ヶ所を云ひ、玄翁和尚は當時の高田鄕、今勝山町化生寺の開山である。

三十六、酒槽石

眞庭郡粟原の雄木谷に酒槽そつくりの石があつて、中には何時もなみ〳〵と水が溜つてゐた。

野良から歸りの疲れきつた牛馬もこゝまで來ると、其石に溜つた水の中に鼻を浸してしたゝか飲み、元氣を恢復して歸るのを常とした。

こゝに或る百姓が此話を聞いて不思議に思ひ、早速雄木谷へ行つて此石に溜つてゐる水を手に掬つて飲んで見た。實に驚くでは無いか、それは酒であつた。しかも芳醇な美酒ではないか。百姓大いに喜び、誰にも知らせぬやう密かに其不思議な石を持ち歸つて、酒屋を始めた。さうすると其家は忽ち富み榮えて、其地方で指折りの富豪となつたと云ふことである。

三十七、男山女山

苫田郡大野村大字土居と云ふところに、男山女山と云つて、むき合つてゐる山がある。男山の方が少しばかり高い。

それは昔、大人樣と云ふ方が此二つの山を擔つて來たが、餘程重かつたと見えて、香々美村の桝形山と云ふ桝を三個程積上げた形をした山へ腰を下して休んだのだ。其時下したまゝになつたのが今の男山と女山であつて、下したはずみに女山の南の半分の下の方が崩れて、今に崩れたまゝである。

大人様が腰掛けたまゝで茶を挽きはじめると、其粉が溜つて今の香々美村にある茶臼山が出來た。桝形山に腰をかけてゐる時に、片脚を香々美村の澤田といふところに踏張つてゐたさうで、今に足形堤といふところが其處にある。此堤はちやうど足袋の底の形に出來てゐて、水が溜つて一つの池になつてゐる。片足は何處へ踏張つてゐたのか跡が殘つてゐないからわからない。男山女山の頂上には社があるが、いづれも大人様を祀つたものでないらしい。

三十八、杓子岩

杓子岩は苫田郡泉村大字箱の舊箱神社の近傍にある。夜、此岩の傍を通ると、岩が杓子をつき出して「味噌をくれ」と言ふさうである。

三十九、茄子畑

天正（一五七三―一五九二）の頃、勝田郡高圓の里に會藏坊と云ふ修驗者がゐた。或る年の初夏に大峰に詣でて異僧に出遭つた。兩人の間に果物についての話が暫らく續いたが、會藏坊は誇りかに、

「拙僧の山内では、もう茄子が實を結んで御座る」

と言つた。異僧はから〳〵と嘲笑ひ、

「奇體なことを聞くものぢや。夏の初めに茄子のなるわけが御座らぬ」

と言ふ。會藏坊が、

「之れ程までに申しても信ぜられぬか。近い所ならば急ぎ下山して一つ持參致さうに」

と言ひ張ると、異僧の顏には忽ちたゞならぬ忿怒の形相が現はれた。會藏坊甚だ恐れをなし、早速下山して國へ歸つて見ると、之れはまた何んたることだ。此間まで丹精して作り上げた茄子畑は草蓬々として見る影もなく荒れ果てゝゐるばかりか、たつた一人の愛娘は無慘にも何者にか引裂かれて、茄子畑のほとりに虛空を摑んで悶死して居り、高き銀杏の枝には娘の片袖がひら〳〵と搖めいてゐた。

四十、白壁の池

勝田郡吉野村の美野と云ふ所に白壁の池といふ池がある。この池は日照り知らずの物凄い古池で、池の中には片目の鰻が棲んでゐる。

それは昔或る雨の日の晩、一人の馬方が馬に茶臼をつけて、池の堤を通つてゐたところ、片目であつた爲にかすべつて池の中に落ちこみ、死んでしまつたが、遂に其遺骸は上らなかつた。そして池中に化して片目の鰻となつてしまつた。今でも雨の降る日に、池の堤に立つて靜かに聽いてゐると、池の底で茶臼を挽いてゐる音が聞えて來ると云ふ。

四十一、焙硝の粉

寛政年間（二四四九—二四六〇）英田郡吉野村であつた話である。

或る夏の夕暮、此村の宇兵衛と云ふ獵師が獵を終へての歸り路、向ふの山で、

「宇兵衛どん、宇兵衛どん」

と呼ぶ者がある。疲れた足をひきずつて行つて見ると誰もゐない。其樣なことがあつてから三十日間も、毎晩同じやうに呼び掛けられた。宇兵衛も少し氣味惡くなつて來た。

やがて七月の盆前になつた。今宵殊に月が美しいと宇兵衛がぢつと月を眺めてゐるとまた誰か、

「宇兵衛どん、宇兵衛どん」

と呼び掛ける。宇兵衛も癪にさはつたと見え、

「何用だ」

と怒鳴つた。

「盆にはお迎ひに參らうか」

と形の無い者が答へる。宇兵衛はこゝだとばかり

「盆には來てくれ。鉛の團子に焰硝の粉をかけて御馳走してやる」

と言ひ放つた。

之れには閉口したのか、其後「宇兵衛どん、宇兵衛どん」と呼ぶ聲はぱつたりと絶えた。

四十二、赤石

赤石は英田郡江見村大字內谷と吉野村大字大聖寺との境にある。此岩から赤水が湧き出る故赤石と稱する。

四十三、二つ柳

或る時、出雲の國から一人の男巡禮が來た。そしてそこの觀音堂に參つた頃はもうおひる過ぎであつたので、川ばたの柳の小枝を折つてお箸がはりにして食事をしてゐたが、此巡禮は足を痛めてゐたので、之れから先の長い旅路が續けられるかどうか甚だ心もとなく思ひ、食事がすむと今つかつた柳の小枝を地上にさして、道中安全であるやうにと觀音樣に祈つた。

そこからまた重い笈づる背負つて旅をつゞけたが、觀音樣の御利益であらう足の痛みもよくなつて、殘る隈なく巡拜を終へて、或る年の春の暮に再び此觀音堂のある川ばたに通りかかつた。

其時巡禮の驚いたことは、何年か前にこゝでお辨當をつかつた時、箸として用ひた柳の小枝が根を下したものと見えて、綠滴るやうな二本の柳となつてゐたことで、巡禮はしばらく其柳の影で休んで故郷へ歸つた。

そこは昔の美作國大井の莊の二つ柳といふ所で、今は久米郡大倭村南方中と云ふ。二つ柳の地名は此事

から始つたと云傳へられてゐる。二本の柳は二百年前の大水に流されたが、其後繼の柳が大木になつてゐる。

四十四、笛吹山

久米郡稻岡村に笛吹山と云つて、滴るやうな綠色の軟かい肌をもつ山がある。

それは空薄霞む春の月夜も更けて、此山麓の石高と云ふ處に住む老農の三右衛門がふと起きて戸を繰つた。其時聞えたのは、いつもの山川の澄みきつた瀨の音ではなくて、朧月に呼びかけるやうな笛の音であつた。

「この眞夜中に、はて誰の風流ぢやらう」

と怪しむ三右衛門は、その笛の音といふ絲を身に結ばれて手繰られるやうに、叢を分け林をくゞつて笛の音のする方へと行つた。

三右衛門は遂に笛の主を見付けた。絽模樣のやうに陰影を翳す松林の巖の上に、月の精かと思はれるやうな美しいお姫樣が、亮々と一管の笛を吹きつゝも自ら聽きとれ、まるで靈なき女神像の如くであつた。月光が靜かに其面わに、衣袂に降りそゝぐ。

「これはさてまあ、どなた樣で御座ります」

あたりの靜けさと此嚴肅さとに抑へられて、朴訥な三右衛門は巖の前にひれ伏して、恐る〳〵かう問うた笛の音ははたと止んだ。そして銀鈴のやうにさやかな聲で、

「わらはは瀨織津姫と申します。下界に住みかを求めて參りましたが、何處か住みよい山はありませんか」

日頃から信心深い三右衛門は深く感激して、

「御勿體ないことで御座ります。やつがれの考へを申上げますと、此山の眞向に岩筒山と申す山が御座ります。此山と岩筒山とを比べますと、岩筒山の方が扇の丈だけ高いと申しまする。お姫樣にはその岩筒山へ御越しになつてはいかゞなもので御座りませう」

と聲ふるはせて答へた。かくと聽かるゝや、

「さらば、その岩筒山へ參りませう」

との聲を殘して、姫の姿空に飜るよと見るまに消えて再び見ることは出來なかつた。そして其時御袂より落ちたる石は三右衛門によつて祀られた。これが今の岩筒神社の由來であると。

此奇蹟のあとを高麗犬田と稱するは何故か。また三右衛門田といふ名も今に殘つてゐる。

一本書傳說の原據

すべて敬稱を略しましたがお許し下さい。

備前國

1 天神岩—備藩松本亮著「東備郡村志」卷之一に據る。
2 弓の名人斑鳩三次—岡長平著「岡山太平記」に據る。
3 金川の法號石—「東備郡村志」卷之七に據る。
4 猪の股の急流—杉山榮著「縣下の傳說」(萬代勝栗者「萬代博物館創設誌」所載)の中、高山晃寄稿「猪の股」に據る。
5 血洗の瀧—羽生永明著「詳解平賀元義歌集」、「縣下の傳說」中「血洗の瀧」花田一重編「鄕土文集吉備の國」第二輯の中「血洗の瀧」等に據る。
6 大山鳥—「縣下の傳說」に據る。
7 大蛇に追はれし龍神の乙姬—花田一重稿「岡山縣の蛇物語」

8 浦上の婚禮—「東備郡村志」卷之四に據る。
9 犬島の犬石—「縣下の傳說」の中、海野一馬寄稿「犬島の犬石」「鄕土文集吉備の國」第一輯の中、成本岩美寄稿「犬島の犬石」に據る。
10 裳掛岩—「縣下の傳說」中、小林久磨雄寄稿「裳掛岩」及びARS發行「日本兒童文庫」8柳田國男著「日本神話傳說集」の「大師講の由來」の中、原據邑久郡誌の傳說に據る。
11 西大寺緣起—馬場壽夫編纂「西大寺商工案內」西大寺回答、雜誌「汎岡山」昭和六年八月號中花田一重の「岡山縣の民謠」に據る。
12 沖田の人柱—原據「吉備溫古」桂又三郎編「岡山縣地名傳說集」に據る。
13 蘭の香—高木恭夫著「下津井史傳說篇」に據る。
14 浮洲岩—高木太亮軒著「和氣絹」に據る。

備中國

15 大島屋の甘藷種—大森疎梅稿「抄註倉敷に於ける傳說」に據る。
16 金の雞—「抄註倉敷に於ける傳說」に據る
17 不洗觀音の緣起—「鄕土文集吉備の國」第一輯の中、大森秀子寄稿「不洗觀音緣起」に據る。
18 旛立松—原據「備中誌」桂又三郎編「岡山縣名木珍石傳說集」に據る。
19 千年比丘尼—「文集つぼみ」の中、杉本草一の「千年比丘尼」に據る。

20 玉島にゐた頃の良寛さん—昭和七年二月六日岡山放送局にて花田一重放送の「圓通寺の良寛さん」に據る。

21 血染の繪馬—「縣下の傳說」に據る。

22 猪鹿の鉢わり—「今昔物語」本朝の部卷第十、白髮部猪鹿打破乞食鉢感現報語第廿六に據る。

23 鑿矢の宮—「縣下の傳說」の中、樂天齋寄稿「鑿矢の宮」に據る。

24 五十歲落—岡山縣高梁中學校有終會發行「有終」鄕土號、傳說の中、岡本毅の文に據る。

25 吉備津彥命の鬼退治—池田侯爵家本「備陽記」卷二（享保六年辛丑歲八月石丸定良編輯）所載「吉備中國蘆守鬼ノ城緣起」（延長元年十二月日菩提寺沙門圓會僧都謹筆本覺寺隆生僧正同考七人不記名）淺野辨次郎著「件退治鬼退治」所載「吉備津神社緣起」等に據る。

26 八幡の樂人元正の笛—「十訓抄」第十、可ㇾ庶ニ幾才能藝業一事の二一に據る。

27 赤土の傳說—「有終」鄕土號、傳說の中、大島淸の文に據る。

28 弘法大師と栗—中國民俗學會發行「中國民俗研究」昭和八年三月號所載、桂又三郎の「備中北部傳說」中、村田正雄寄稿に據る。

29 玄賓谷—桂又三郎編「岡山縣地名傳說集」に據る。

30 鬼石—「縣下の傳說」の中、武田正男寄稿「鬼石」に據る。

31 河童石—花田一重稿「傳說稿」の中、流尾照子談「河童石」に據る。

32 水神の怒—阿哲郡敎育會發行「阿哲郡誌」に據る。

美作國

33 姿見橋—野村完六編輯「美作鄕土讀本」上卷、三〇姿見橋（出典苫田郡誌）に據る。

34 佛の片袖—「縣下の傳說」の中「幽靈佛」に據る。

35 化生寺の龍石—原據「眞庭郡誌」桂又三郎編「岡山縣名木珍石傳說集」花田一重所藏著者不明「新選增益都會節用百家通」等に據る。

36 酒槽石—「縣下の傳說」に據る。

37 男山女山—高木敏雄著「日本傳說集」の中、堀江寄稿「男山女山」に據る。

38 杓子岩—「岡山縣名木珍石傳說集」に據る。

39 茄子畑—「縣下の傳說」に據る。

40 白壁の池—原據「東作誌」「日本兒童文庫」8「日本神話傳說集」の中「片目の魚」の一節に據る。

41 焰硝の粉—「縣下の傳說」に據る。

42 赤石—原據「英田郡誌」「岡山縣名木珍石傳說集」に據る。

43 二つ柳—原據「作陽誌」「日本兒童文庫」8「日本神話傳說集の中「御箸成長」の一節に據る。

44 笛吹山—「縣下の傳說」に據る。

二　岡山縣傳說分布表

左記は本書所載の傳說の題目と其傳說の發生地を示したものである。

備前國

1 天神岩　岡山市弓之町
2 弓の名人斑鳩三次　同市
3 金川の法號石　御津郡金川町
4 猪の股の急流　同郡牧山村(字)下牧
5 血洗の瀧　赤磐郡山方村是里
6 大山鳥　同
7 大蛇に追はれし龍神の乙姫　和氣郡福河村
8 浦上の婚禮　同郡片上町西片上
6 犬島の犬石　邑久郡朝日村犬島
10 裳掛岩　同郡裳掛村(大字)虫明(字)破砂
11 西大寺緣起　上道郡西大寺町
12 沖田の人柱　同郡沖田村
13 蘭の香　兒島郡下津井町
14 浮洲岩　同郡藤戸町

備中國

15 大島屋の甘藷種　倉敷市本町
16 金の雞　同　東町
17 不洗觀音の緣起　都窪郡豐洲村(大字)中帶江
18 牆立松　同郡帶江村有城
19 千年比丘尼　淺口郡金光町(大字)占見
20 玉島にわたる頃の良寛　同郡玉島町(大字)柏島
21 血染の繪馬　小田郡(東部某村)
22 猪鹿の鉢わり　同郡
23 鑿矢の宮　後月郡芳井村野宮
24 五十歲落　同郡三原村村入
25 吉備津彥命の鬼退治　吉備郡眞金町宮內
26 八幡の樂人元正の笛　同
27 赤土の傳說　上房郡津川村

28 弘法大師と栗　同郡高梁町
29 玄賓谷　川上郡落合村(字)近似
30 鬼石　同郡高山村
31 河童石　阿哲郡千屋村(字)花見
32 水神の怒　同郡刑部村

美作國

33 姿見橋　津山市
34 佛の片袖　同
35 化生寺の龍石　眞庭郡勝山町旦
36 酒槽石　同郡美川村粟原、雄木谷
37 男山女山　苫田郡大野村(大字)土居
38 杓子岩　同郡泉村(大字)箱
39 茄子畑　勝田郡豐並村高圓
40 白壁の池　同郡吉野村美野
41 焔硝の粉　英田郡吉野村
42 赤石　同郡江見村(大字)内谷

43 二つ柳　久米郡大倭村南方中
44 笛吹山　同郡稲岡村

三岡山縣傳說年表

紀元前	天紀			
	五七三	崇神天皇	一〇年	素盞嗚尊出雲の簸川上に八岐大蛇を斬る。(傳說—血洗の瀧)
	五七四	同	一	十月四道將軍を派遣す。(吉備津彦命の鬼退治)
			一	四月四道將軍荒夷平定を奏す。(同)
一三九〇頃		天平年間		僧增慶帶江の不洗觀音開基。(不洗觀音の緣起)
一四一一		天平勝寶	三	二月八日皆足姫上道郡金岡の庄に觀音堂を創建す。(西大寺緣起)
一四三八		寶龜	九	九月下旬僧安隆右觀音堂を再建す。(同)
一四七六頃		弘仁	七頃	僧玄賓哲多郡土橋村の湯川寺に隱る。(玄賓谷)
一四七八		同	九	六月十七日僧玄賓寂す、年八十九。(同)
一四八一		同	一	二	僧空海讃岐國萬農池を開鑿す。(大蛇に追はれし龍神の乙姫)
一四九四		承和	元	僧空海邑久郡虫明に等覺寺開基。(裳掛岩)
一四九五		同		二	三月二十一日僧空海寂す、年六十二。(弘法大師と栗、裳掛岩)

一五六一	延喜	元	正月菅原道眞左遷せらる。（犬島の犬石）
一五六三	同	三	二月菅原道眞薨ず、年五十九。（同）
一七八〇頃	（鳥羽天皇の時）		玉藻前の惡念化して殺生石となる。（化生寺の龍石）
一八四四	壽永	三	十二月七日佐々木盛綱藤戸の先陣をなす。（浮洲岩）
二〇四五	至德	二	八月十三日僧玄翁詔を奉じて殺生石を破碎す。（化生寺の龍石）
二一〇六	文安	三	我が邊民明境を侵す。（金の雞）
二一〇九	寶德	元	四月足利義政將軍宣下。（同）
二一六一頃	文龜	頃	宮崎刑部和氣郡福河村に住む。（大蛇に追はれし龍神の乙姫）
二一九二	享祿	五	和氣郡土田松山城主浦上近江守國秀、同掃部介政宗に降る。（浦上の婚禮）
二二〇二	天文	一	富川禪門美作國戸川の宿に居り門田平助を養子とす。（姿見橋）
二二四〇頃	天正	年間	藤井好玄後月郡芳井村聖靈山に城を構ふ。（鑿矢の宮）
二三三〇頃	寛文	年間	肥後熊本の城主の乘船下津井沖にて暴風雨に遭ふ。（蘭の香）
二三三二	同	一	備前藩主池田光政致仕、池田政言を鴨方二萬五千石に分封す。（天神岩）
二三四七	貞享	四	岡山天神山の天滿宮を酒折宮境内に遷す。（天神岩）
二三九二頃	享保	一七頃	倉敷代官井戸平衛門甘藷種を領内に頒布す。（大島屋の甘藷種）
二四三九	安永	八	僧良寛圓通寺第十世國仙に隨ひて玉島に赴く、年二十二。（玉島にゐた頃の良寛）
二四五〇頃	寛政	年間	英田郡吉野村の宇兵衛狩獵をなせり。（焰硝の粉）
二四九一	天保	二	正月六日僧良寛寂す、年七十四。
二五二四	元治	元	十一月征長第一役、備前長臣池田出羽、伊木長門、池田伊賀、各々手兵を以て廣島に屯す。（弓の名人斑鳩三次）
二五二五	慶應	元	十二月二十八日平賀元義歿す、年六十六。（血洗の瀧

四 傳說研究參考書目

日本の神話傳說を研究する上に參考すべき書籍は隨分ある。最も手近いもので、「日本神話傳說集」（柳田國男氏著）は「日本兒童文庫」中の一書であるが、其樣な子供の讀物の中の傳說でも、原據を擧げると左の如く多數の書名となるのである。

十方庵遊歷雜記　土俗談話　土佐州郡志　土佐海續編
日本風俗志　日本鹿子　日本周遊奇談　日次記事
日女島考　上總國誌稿　利根川圖誌　相中襍志
相生集　江戸名所記　江戸志　上野志
上總町村誌　甲子夜話　甲子之古道　甲斐國志
紹巴富士見道記　秋田縣案內　三都雜記　三國名勝圖會

見付次第

伊勢崎風土記
攝津名所圖會
諸國里人談
撫子日記
明治神社誌料
鄉土光華號
南會津郡案內誌
阿州奇事雜話
張州府志
安蘇史
越後野史
下野風土記
信濃奇勝錄
大和年中行事一覽
和賀稗貫二郡志

高崎志
伊勢名勝誌
因果物語
稿本美濃誌
豐薩軍記
能美郡誌
若狹郡縣志
南路志
新篇武藏風土記稿

邑久郡誌

半日閑話
越後國式內神社案內
下野神社沿革誌
信府統記
太宰管內志
和泉名所圖會

高木氏日本傳說集
伊豫溫故錄
因幡志
傳說叢書
廣益俗說辨殘篇
能登國名跡志
南紀土俗資料
南總乃俚俗
新編常陸國志
安倍郡誌
小谷口碑集
遠野物語
信達二郡村誌
大日本老樹名木誌
入間郡誌
房總志料

溫故之栞
伊豆志
絨石錄
傳說の下伊那
廣益俗說辨遺篇
鄉土研究
南安曇郡誌
紀伊續風土記
攝陽郡談
安房志
越後風俗問答狀
遠江國風土記傳
信達一統志
大海集
和漢三才圖會
印旛郡誌

近江國輿地誌略
松浦昔鑑
肥後國志
吉賀記
薩隅日地理纂考
古謠集
生蕃傳說集
山梨縣町村誌
行脚隨筆
三州橫山話
北野誌
秋葉土產
棚守房顯手記
常陸國風土記
東遊雜記
載恩記

芦分船
松尾筆記
奇談雜史
眞澄遊覽記
藝藩通志
古風土記逸文考證
丹洞夜話
共古日錄
莊內可成談
閑田耕筆
蒲生郡誌
木曾路名所圖會
趣味の傳說
肯構泉達錄
津村氏譚海
都名所圖會拾遺

作陽誌

飛彈國中案內
校訂筑後志
隱州視聽合記
月之出羽路
播磨鑑
豐多摩郡誌

民族

東作誌

益田郡誌
口丹波口碑集
雪之飽田根
鹿袋
美馬郡鄉土誌
遠碧軒記
楓軒雜記

德島縣老樹名木誌
神都名勝誌
出雲國式社考
燈下錄
斐太後風土記
筑紫野民譚集
山吹日記
黑甜瑣語
三州奇談
米の落穗
雄鹿名勝誌
益田郡誌
笈埃隨筆
二荒山神傳
溪拾葉嵐集
卽事考

駿國雜記　登米郡志　願掛重寶記　赤穗郡誌
耶馬臺國探見記　高市郡志料　浪華百事談　霞村組合村是
横須賀郷里雜記　木曾古道記　頸城三郡史料

以上百六十三部であつて、其内岡山縣に關するものが三部ある。

次に私が調べ上げた傳說（神話の項目も置いた）研究の參考書を掲げよう。

一、一般傳說

日本傳說集（高木敏雄著）
日本神話傳說の研究（同）
日本傳說研究（藤澤衛彦）
日本國民傳說（高木敏雄）
日本兒童文庫8日本神話傳說集（柳田國男）
日本傳說怪奇茶話（近藤佶）
日本傳說趣味の國（日野崎彌彦）
日本傳說叢書13（日本傳說叢書刊行會藤澤衛彦）
北武藏、阿波、信濃、上總、伊豆、播磨、明石、佐渡、下總、讃岐、和泉、安房、伊賀の卷
傳說の跡を尋ねて（齋藤溪舟）

傳說幽靈とおばけ（高峰博）
傳說民話考（長尾豐）
傳說と歷史（藤澤衛彦）
傳說の山水（坪谷水哉）
神話傳說大系第十三卷日本神話傳說集（神話傳說集刊行會）
趣味の旅傳說を尋ねて（藤澤衛彦）
趣味の傳說（五十嵐力）
民俗風尙民俗篇古代よりの史稿逸話傳說（內務省）
口碑珠玉（五十嵐力）
童話及傳說に現れたる空想の研究（蘆谷重常）
牛に關する傳說雜話（舟木夏江）
海の傳說と情話（大阪朝日新聞社）
山の傳說と情話（同）
諸國傳說（朝日新聞社）
桃太郎の誕生（柳田國男）
東西幽靈考（藤澤衛彦）

變態傳說史(同)
萬葉傳說歌考(川村悅磨)
昭和の大日本傳說編(有賀四郎著)
郷土傳說を戲曲化せる兒童劇脚本(長尾豐)
日本靈異記、三國傳記、宇治拾遺物語、古今著聞集、本朝故事因緣集、本朝靈應記、因果物語
(以上、三十部)

二、地方傳說

傳說の江戸(柴田流星)
傳說の越後と佐渡(中野城水象吾)
傳說と九州(筑前の卷)(竹田秋樓)
傳說の鹿兒島(三木英太郎)
傳說を尋ねて(大村興之介)
傳說の熊野(那須晴次)
傳說の上州(中島吉太郎)
傳說老狐(小牧山吉五郎)
傳說集羅生門の鬼(島津久基)
郷土物語第十編下關傳說(吉村藤舟岩吉)

我が郷土の史蹟と傳說2(澁谷吾住齋)
アイヌの傳說(青木純二)
アイヌの傳說と情話(同)
アイヌ人とその說話(ジョンバチェラー)
アイヌの爐邊物語(同)
アイヌの話(佐々木)
アイヌ民話(工藤梅太郎)
アイヌ物語(アイヌ武隈德三郎)
アイヌ叙事詩、ユーカラの研究(金田一京助)
臺灣神話傳說集(中村亮平)
生蕃傳說集(佐山融吉、大西嘉壽)
爐邊叢書神を助けた話、おとら狐の話外二(柳田國男)
甲斐昔話集(土橋里木)
朝鮮民譚集(孫晋泰)
朝鮮の迷信と傳說(楢木末實)
朝鮮物語集附俚諺(高橋亨)

溫突夜話（鄭寅燮）
津輕口碑集（內田邦彥）
津輕むがしこ集（川合勇太郎）
安房の傳說（羽山常太郎）
史蹟傳說と房總案內（大塚貞藏）
伊豆傳說集（後藤江村）
川越の傳說（岸傳平）
牟婁口碑集（雜賀貞次郎）
信濃の傳說（酒井松堂）
島根縣口碑傳說集（島根縣敎育會）
パオラ島の傳說と民謠（宮武正道）
江戶の口碑と傳說（佐藤隆三）
琵琶湖傳說集（金井利夫）
神田の傳說（清水晴風）
神秘の靈峰高野山の傳說（水原堯榮）
橫濱の傳說と口碑（橫濱鄕土史研究會）

修禪寺夜話（深谷博道）
島の傳說（南國神園）
東榮村傳說誌（佐久間喜三郎）
琉球昔噺集（嘉納綠村）
伊那の傳說（岩崎淸美）
大和昔譚（澤田四郎作）
相馬傳說運は開けり（齋藤笹舟）
同、黃金の山（同）
天草島傳說纂輯（濱田隆一）
長崎の傳說と由來（九州及九州人社）
秘曆を掘る阿波傳說集（橫山春茂）
愛媛縣傳說稿（愛媛縣師範學校）
武藏御陵附近史蹟案內の內、城山附近の傳說（島村龍造）

三、岡山縣の傳說

縣下の傳說（杉山榮）
岡山縣傳說集（文獻書院）

（以上、五十五部）

岡山太平記（岡長平）
岡山秘帖（高取久雄）
岡山縣の傳說（花田一重）
岡山縣名木珍石傳說集（桂又三郎）
岡山縣地名傳說集（同）
郷土文集 吉備の國2（花田一重）
抄註倉敷に於ける傳說（大森疎梅稿）
下津井史傳說篇（高木恭夫）
桃太郎の史實2（難波金之助）
有終—郷土號（昌山曉龍）
中國民俗研究（中國民俗學會）

四、傳說雜誌

旅と傳說

五、神話

日本建國神話（高木敏雄）
日本神話物語（同）

（以上、十三部）

日本神話の研究（松本信廣）
日本神話（鈴木友吉）
日本神話（文藝社編輯部）
國體起源の神話學的研究（堀岡文吉）
日本神話 御國の咄し（高頭甚兵衛）
神話學論考（松村武雄）
神話學概論（西村眞次）
神話（中島悅次）
比較神話學（高木敏雄）
古事記神話の新研究（石川三四郎）
播磨風土記物語（松岡靜雄）
常陸風土記物語（同）
アイヌラツルの傳說（アイヌ神話）（金田一京助）
アイヌ神話（中田千畝）
古事記、日本書紀、出雲風土記其他の風土記、今昔物語

（以上、二十部）

五　小學讀本中の傳說

小學讀本の中に如何なる傳說があるか、又其原據は何かと云ふことを調べて見た。參考としたのは、文部省の編纂趣意書、宮川菊芳著「小學國語讀本解說」其他の教授書、高等師範學校、師範學校等の國語科教官の談及び回答等であつた。（傍線をひけるは、編纂趣意書に記載されたる原據）

○尋常小學國語讀本中の傳說の原據

卷次	課題	原據
一	四　ウシワカマルの橋	（謠曲「橋辨慶」）
二	十四　モチノマト	（「山城風土記」伊奈利社の條及び豐後國玖珠郡の古傳說）
	二十五　大江山	（古來の傳說「お伽草子」）
三	十四　うらしま太郎	（在來の童話「丹後風土記」逸文「日本書紀」雄略天皇二十二年の條）
	十八　をののたうふう	（竹田出雲作淨瑠璃「小野道風青柳硯」）
	二十六　はごろも	（世阿彌作謠曲「羽衣」）
四	五　白ウサギ	（「古事記」上卷）
	三　大蛇たいぢ（神話）	（「古事記」上卷）
	五　金鵄勳章（金色の鵄）	（「日本書紀」神武天皇の條）
	十五　養老	（「古今著聞集」卷八）
	二十　八幡太郎	（「古今著聞集」卷九）
六	十五　萬じゆの姫	（お伽草子）
八	十一　大岡さばき	（一子ども爭　二石地藏）（俗傳「大岡政談」）
九	三　弟橘媛	（「古事記」中卷「日本書紀」）
	十九　星の話（小熊座大熊座）	（神話）（ギリシヤ神話）
十	十二　鉢の木	（觀阿彌作謠曲）「鉢の木」（世阿彌とも云ふ）
十一	十一　畫師の苦心	（柳澤里恭淇園著「雲萍雜志」）
十二	二　出雲大社（國讓り）	（「古事記」上卷「日本書紀」「千家尊福著「出雲大神」）
	二十一　青の洞門	（金龍道人敬雄撰青洞門の碑文禪海墓石の文字參考、古川古松軒著「西遊雜記」）

○小學國語讀本（尋常科用）中の傳說の原據

一	（二六頁）カヘル（小野道風）	（竹田出雲作淨瑠璃「小野道風青柳硯」）
二		

三　十一　國　び　き　（「出雲風土記」意宇郡の部）
十三　牛　若　丸　（「義經記」「辨慶物語」謠曲「橋辨慶」）
十五　一寸ボフシ　（「お伽草子」）
二十四　浦　島　太　郎　（「丹後風土記」逸文中「萬葉集」卷九）

○高等小學校中の傳說の原據

（參考「野史」「武者物語抄」「本朝通鑑」「寛政重修諸家譜」「鹽尻」「常山紀談」）

一　二　太田道灌養を借らうとする話　（谷津直秀著「趣味の動物」淸少納言著「枕草子」）

四　四　簑　蟲　（橘南谿著「東遊記」後編卷之五）

第三學年用上
第三學年用下

十七　廣　德　寺　の　門

紙數の都合上、以上の傳說に就き、論說の一部分を揭げて參考に供する。

一　餅　の　的

「モチノマト」は白鳥飛來の傳說である。「山城風土記」に、

伊侶具秦公（イログノハダノキミ）。積二稻粱一有二富裕一。仍用レ餅爲レ的者。化成二白鳥一。飛翔居二山峰一。伊禰奈利生（イネナリヒビ）。遂爲二社名一。云々と見え、「豐後國風土記」にも類似の傳說がある。

二　大　江　山

「大江山」の酒顚童子は鬼賊退治英雄傳說である。左に揭ぐるは、文學博士黑板勝美氏の「大江山の酒顚童子」の一節―傳說は時代の習俗の反映―である。

諸書の傳ふる所、口碑に存する所、多少は之（お伽草子）と趣を異にしてゐる點もあるであらうが、要するに大體に於ては一致してゐる。誠に剛勇壯快の物語で、一讀血湧き肉躍らしむるものがあるが、無論これを歷史上の事實にして考へることは出來ぬ。一說によれば、當時山陰道の要衝たる大江山附近に勢力のある强盗が住んでゐて、時々部下を都に出し、或は自らも出て來て剽掠を恣まにし、美人財寶を奪ひ還つたのが、此の物語の基礎となつてゐるといふ。正史の上には徵すべき材料がないとしても當時京都に盗賊の横行した事實があるから、そんなこともあり得ないとは必ずしも考へられぬ。故に酒顚童子は實在の强盗を小說化し、物語化したものだといへぬでもないが、それにしても大江山の鬼退治といふ如上の筋は殆んど全部これを假作の物語と見なければならぬ。

傳說は時代の習俗の反映―…傳說は所詮傳說で、之から事實を抽象する譯には行かぬ。併し之によつて賴光の武勇が顯著であつたことを知り、且つ中世頃の日本國民の思想、迷信、信仰などを窺ふには極めて重要な且つ趣味の深い材料であると思ふ。尤も此の話の出來たのは、賴光等が山伏の姿に身を變したと云ふことなどから見ると、勿論鎌倉時代以後の事であらうが、鬼が出ると云ふ事は、藤原時代によくあつた思想で、「今昔物語」などの中にも鬼の話が隨分多く載つて居る。それ等には單に鬼は恐ろしい

ものであるが、それが次第に鬼神と云ふ觀念を混合し、遂に神變不可思議のものと考へらるゝに至つたのである。又大江山は、京から山陰道へ出る道で、丁度京師から北方に當つて居り、何うしても經過せねばならぬ道筋である。諸君…御承知の小式部内侍の歌―「百人一首」の中に入つてゐる

大江山いくのゝみちのとほければ
まだふみも見ずあまのはしだて

といふ歌の通り、大江山は如何にも恐ろしい處である。其處には鬼も住まう、また盜賊などがゐて人を惱まさうと云ふ觀念が結び附いて、架空の「大江山」といふ、實在の山岳から離れたものが出來上つた而してそれに賴光といふ快豪を拉し來つて連結せしめ、鬼退治といふ武勇譚の一くさりを生じたのであらう。

少式部内侍の歌、原文には「道は」とあつたが「百人一首」「金葉集」雜の上等を參照し、誤植と思はれるので「道の」として置いた。

三　浦島太郎

龍宮傳說の中、最も形の整つたのは此浦島傳說である。左に揭ぐるは、文學博士上田萬年氏の「雄大なる浦島傳說」の一節―諸書に見ゆる浦島傳說―である。

實に意味のありげな、面白いローマンスである。ロンマンスとして見るには是(「丹後風土記」の逸文中に現はれたる浦島)だけで澤山であるが、併し吾々はそれ以上更にそれの起原を因ね、系統を質し、意義を考へる必要はなからうか。此の「丹後風土記」中にある舊宰伊預部馬養連の記といふのは、一體如何なるものであらうか。無論今日では詳らかでないが、故小中村清矩氏は「群書類從」卷百三十五に收めてある浦島子傳がそれがあると云ひ、故栗田寬氏は「扶桑略記」雄略天皇の條に載せてある浦島子傳がそれだと云つて居る。その何れが正しいかといふ穿鑿は他日に讓ることゝし、浦島傳說の正史に見えてゐるのは「日本書紀」の雄略天皇二十二年の條が始めであらう。それには、

二十二年秋七月。丹波國餘社郡管川人。水江島子。乘ㇾ舟而釣。遂得二大龜一。便化爲ㇾ女。於ㇾ是浦島子。感以爲ㇾ婦。相逐入ㇾ海。到二蓬萊山一。歷二觀仙衆一。

とあるが、之に依つても此の傳說が、昔から如何に有名であつたかゞ分る。「萬葉集」の卷九には「春の日の霞める時に、墨吉の岸に出で居て、釣船のとをらふ見れば、古の事ぞ念ほゆる、水の江の浦島兒が堅魚釣り鯛釣り矜り、七日まで家にも來ずて―」と云ふ有名な長歌があり、天慶二年の日本紀竟宴には此の事を詠んだものがあり、その他「釋日本紀」の引いた本朝神仙傳や、天書にも見えてゐる。その細事に至つては、今日傳ふる所のものと多少の相異があるけれども、大綱に於いては全く一致してゐる。また文學博士佐佐木信綱氏は其著「萬葉集選釋」に曰く

浦島の傳說は、この長歌（萬葉集卷九所載）のほかに、最も古くは日本紀雄略天皇の卷に……あり、又、丹後風土記に委しく載つてゐる。

而して注意すべきは、これらの諸傳中、この萬葉の長歌が最も浦島傳說の原始的、また本原的の形を

有してゐることである。それらの點に就いて委しく言ふと長くなるから、一二主な點を言つて見ると、日本紀も風土記も、ともに浦島が龜を得、龜が神女と化したとあるが、これは長歌にはない。兩書とも女を蓬萊の神女とした。これは言ふまでもなく支那思想の影響で、長歌では單にわたつみの少女となつてゐる。而してまた蓬萊といふ如き思想は長歌には見えないで、單にとこ世、即ち遠い國なる海底の宮となつてゐる。次に浦島が歸つて來て、くしげを開く動機が、風土記には神女を感思してとなつてゐる。しかるに長歌では、家や里が見たさになつてをり、隨つて後者では、ゆめあけるなと言つた神女の意志に、自分を故郷の人々にはあはせじとする意志があつたものゝ如く幾分疑つたので、筥を開けてえた結果が、やがてこの疑念の罰のやうに歌はれてゐる。この點の如きは、兩者を比較して見ると、風土記よりもこの長歌の方が一層自然に行つてゐると言へる。

と。「尋常小學國語讀本」卷三、十四らしま太郎は簡單で、「小學國語讀本」尋常科用卷三、二十四浦島太郎は詳細ではあるが、話の筋に變りは無い。そして「日本書紀」や「丹波風土記」のやうに、龜が神女に化したと云ふやうなことは書いてない。次に「萬葉集」卷九の浦島子を詠める長歌を掲げる。

詠二水江浦島子一一首竝短歌

春の日の　霞める時に　住の江の　岸に出でゐて　釣船の　たゆたふ見れば　古への　事ぞおもほゆる
水の江の　浦島の兒が　かつを釣り　鯛つりほこり　七日まで　家にも來ずて　海さかを　過ぎて漕行くに
わたつみの　神のをとめに　たまさかに　い漕ぎむかひ　わたつみの　神の宮の　內のへの　たへなる殿に
たづさはり　二人入りゐて　老いもせず　死にもせずして　とこしへに　ありけるものを
世の中の　かたくな人の　わぎも子に　告りて語らく　暫らくは　家に歸りて　父母に　言をものらひ
明日の如　吾は來なむと　言ひければ　妹がいへらく　常世邊に　またかへり來て　今の如　あはむと
ならば　この篋　ひらくなゆめと　そこらくに　堅めし言を　すみの江に　歸りきたりて　家見れど
家も見かねて　里見れど　里も見かねて　あやしみと　そこに思はく　家ゆ出でて　三年のほどに　垣
もなく　家うせめやも　この筥を　開きて見てば　もとのごと　家はあらむと　玉くしげ　少し開くに
白雲の　箱より出でて　常世邊に　たなびきぬれば　立走り　叫び袖ふり　こいまろび　足ずりしつつ
たちまちに　情けうせぬ　若かりし　肌もしわみぬ　黑かりし　髮も白けぬ　ゆりゆりは　息さへ絕え
て　後終に　命死にける　水の江の　浦島の子が　家どころ見ゆ

反歌

常世邊にすむべきものをつるぎ太刀しが心からおそやこの君

六　中等學校國語讀本中の傳說

中等學校の國語讀本中に如何なる傳說が出てゐるかと云ふことであるが、私は先づ女學校の教科書中左の十種に就いて調べたのである。

1文學博士松村武雄編「最新女子國文」（發行所―寶文館）
2文學博士高野辰之編「女子國文讀本」（光風館）
3文學博士新村出編「改訂新撰女子國文」（永澤金港堂）
4文學博士五十嵐力編「純正女子國語讀本」（早稲田大學出版部）
5文學博士吉澤義則編「女子新日本讀本」（星野書店）
6文學博士高木武編「日本女子讀本」（富山房）
7文學博士下田次郎文學博士尾上八郎共編「新女子國文」第三版（明治書院）
8東京高等師範學校教授保科孝一編「昭和女子國文讀本」（育英書院）
9東京高等師範學校教授垣内松三編「國文鑒」第二版（文學社）
10廣島文理科大學教授鈴木敏也編「日本女子讀本」（中文館）

右の中で、傳說又は傳說をもとゝしたる文學で、二種乃至九種の讀本に出てゐる題目と、其出典とを示すと左の如くである。

1羽衣（9種）―世阿彌作謠曲
2流泉啄木（4）―源隆國著「今昔物語」
3仁和寺の法師（4）―兼好法師著「徒然草」
4長生新浦島（3）―坪内逍遙著「長生新浦島」

5湖山長者（3）―五十嵐力著「趣味の傳說」
6有王島下り（3）―「平家物語」
7夜叉王（3）―岡本綺堂著「修禪寺物語」
8安壽姫と厨子王（2）―森鷗外著「山椒太夫」
9松葉仙人（2）―「十訓抄」
10安宅（2）―坪内逍遙作「安宅」江戸長唄「勸進帳」
11鉢木（2）―觀阿彌作謠曲（世阿彌とも云ふ）
12太田道灌（2）―湯淺常山著「常山紀談」大町桂月作「太田道灌」（山吹の歌物語を傳說として

こゝに掲げた）

本稿を作るにあたり

倉敷市史編纂委員　太森疎梅氏

が特に私の爲めに「倉敷に於ける傳說」稿本十三冊を書きて與へられしを始め、

杉山榮　氏、山陽新報連載「縣下の傳說」

桂又三郎氏編「岡山縣名木珍石傳說集」

同　　氏編「岡山縣地名傳說集」

高木恭夫氏著「下津井史傳說篇」

岡　長平氏著「岡山太平記」

畠山曉龍氏編「有終—鄉土號」

野村完六氏編「美作鄉土讀本」

等より益を受けし處が甚だ多い。また、

帝國圖書館　日比谷圖書館　岡山縣立圖書館

岡山縣玉島高等女學校白華文庫

等の圖書により敎へられし處多く、

東京女子高等師範學校訓導　坂本　豐氏

岡山縣女子師範學校敎諭　川田　芳男氏

岡山縣高梁中學校敎諭　法學士　横山　顯治氏

岡山縣玉島商業學校敎諭　中村　唯一氏

山陽新報社學藝部長　野田　實氏

岡　山　縣　屬　中務　中夫氏

淺口縣六條院農業補習學校助敎諭　釜崎智萬一氏

吉備郡足守尋常高等小學校長　福武　求馬氏

阿哲郡千屋尋常高等小學校訓導　流尾　照子氏

第六高等學校生物學敎室勤務　佐藤　清明氏

岡山縣立圖書館長　武藤　正治氏

同　館　司　書　河本　一夫氏

同　館　員　佐中　茂氏

等は、皆訪問して敎を乞ふた方々であり、吉備郡足守町長枝松十郎氏、同町冠板野清次郎氏等より拜聽せし傳說、岡山縣總社高等女學校敎諭福武辰衛氏惠送の「鄉土史」、同校敎諭川上敏雄氏、岡山放送局魚谷忠氏の回答、岡山縣第一岡山商業學校敎諭高谷孜氏の印刷物等より得たる資料は、次に出版の豫定なる「岡山縣傳說集」に揭載致します。以上の方々其他より多大なる御援助を與へられたことを、玆に深謝致します。

本書に誤謬がありましたら何とぞ御示敎下されたく、なほ御存じの傳說を御惠送下さいましならば幸甚と存じます。

著者しるす

拙稿の成りしところへ、私が一度御目にかゝつたことのある東京高等師範學校坂本豐氏より御返事が來た。私の小研究に斯くの如く援助を與へられしを感謝し、其書翰を掲げて筆を擱く。

御返事がおくれまして申譯なく存じます。校舍を引越しましたので何かと落つかぬ爲にかういふ始末になりました。お茶の水のバラックから大塚の新校舍へ移轉したのです。

高三年用の編纂趣意書は出來てゐない樣でございます。小學校の教材の原據といふものは、決して原據のまゝを讀本にとるといふのでなく、多少のよりどころとした位のもので、全く新精神で書かれてゐるものと御承知願ひ度う存じます。卷三小學讀本の國引にしましても、出雲風土記のまゝとする事は出來ませんので、その文學的情趣がいくらか原據に近いといふ位のもので、「遠い國」といふ語の如きを決して新羅だなどと御解釋なさらぬ樣に願度く存じます。右心づいたまゝを一言附言いたします。益々御自愛、御研究遊ばして、御大成の樣お祈り申してゐます。

昭和九年五月十七日

坂本豐

敬具

新輯 岡山縣傳說讀本 終

新輯岡山縣傳說讀本

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月二十日發行

不版
許權
複所
製有

【定價金六十錢】

著者 花田一重
發行兼印刷人 出原徹 東京市本郷區菊坂町八二
發行所 文正社書店 東京市本郷區菊坂町八二 振替東京六七六一五番
發賣所 文盛堂書店 岡山市上之町四一 電話六四七一番 振替穴吹三六〇五〇番
大賣捌 東京 東京堂 北隆館
大阪 盛文館 福音社
岡山 岡山書籍 細謹舍
吉田書店 隆文堂

■宗田克己著

三版 新考 **岡山縣地理讀本**

菊版九十餘頁 定價五十錢
圖版三十九個入 送料六錢

鄉土の自然と人文を最も正しく、然も新たなる考察の許に世に送る好著

第六高等學校教授 森敬三著 平賀元義名歌評釋 四六版 特製定價一圓二十錢 一七五頁 並製定價一圓

中村唯一著 長歌を通じて良寛を語る 四六版 定價九十錢 一三〇頁 料送六錢

小林久磨雄著 幕末外交使節 池田筑後守 四六版 定價八十錢 一五四頁 送料六錢

野田實著 平賀元義評傳 限定 正編定價五十錢 出版 續編定價三十錢

保田素著 歌集「色と香」 四六版特製 定價六十錢 特殊製釘本 送料六錢

片山三郎著 最も要領得た 新聞經濟欄の見方 四六版 定價四十錢 一二〇頁 送料四錢

發行所 東京市本郷區菊坂町二八 振替東京六七六一五番 文正社書店

653
337

岡山傳

（定價六十錢）